何もかもが、止まってしまったかのようだった。
痛みも、動悸も、そしてあれほど騒々しかった幻覚さえも、時がちぎれた今となっては欠片すら残っていない。
ただ吸い付くような闇だけが感覚の全てを塞ぐと、延々静寂の中をぼんやり漂うがごとく、心もとなくも穏やかなひと時をアルトへ与えていた。
それは泳ぎ疲れた午後に覚えるような、まどろみによく似ている。
根拠のない幸福感が満たす、惜しみなき敗北感とも言えた。
身を任せるほどにやがてそれは至極単純な眠気へとすりかわってゆく。外界と分け隔てていた輪郭を、身体というアルトの境界線を、曖昧とさせていった。
果てにふつり、切れたその時、内より闇へ、世界へと、身体感覚は溶け出してゆく。
その流れを止める術などありはしない。
だからして果てまでを覆いつくさんばかり感覚は、肥大していった。
果たしてナニが己で、ドレが世界だったのか。
追いきれなくなるに時間はかからず、暗がりの彼方でひとつ、またひとつ、己が手足は消え失せてゆく。もちろん痛みひとつなくもがれてゆく体に、危機感がなかったといえばウソになるだろう。だがもはや取り返すなどできそうもない。形式程度に訪

れた危機感も、通りすがりの他人よろしく手遅れと見極め、アルトの前を通り過ぎて行くあっけなさだ。

ここにあるのかないのか、やがてアルトにとって自らの体は判然としなくなっていた。確かめるべく動かそうとしたところで、どこに力を入れるべきだったのかすら思い出せず途方に暮れる。やがてそう考える意識だけが、それを構成する言語だけが、闇の中でアルトという領土を主張し続ける浮島と、ポツリ取り残され漂った。その霞のような現象が唯一の証だなどと、まどろみに襲われつつある今、危うさは不安を越えて恐怖をアルトへ抱かせる。

眠るな。

黙することこそ死だと、アルトは己へ訴えた。

言葉を、思考を、手放すまいと手繰り寄せにかかる。

しかしながら眠気に押された思考の実力など、しれていた。言葉はただ支離滅裂に連なるばかりと、やがて体を成さなくなってゆく。

食べたシシカバブが、汚れつつシミに。

あの形の靴底に、減り方だったのだろう？

クセが直す、ことへ。

ハルスローがドック、はアイツが『九〇〇〇』だ。
軽すぎてピンクの。
今はまだ、ない。

ただ自らの解体へ拍車をかけていった。

夜だ。
設定と変更？
抜け出すさ。
いつか。
必ず。
聞きつ。
その。
ひだりに。
りにさ。
何……。

を……。
……。
……。
……。

そうして途切れる思考と呼ばれた連続。
だがそれは入れ替わりと起きていた。
指先の感覚だけが、点と舞い戻る。
何かが触れている。
きっかけに、途切れたはずの思考は再び連続性を取り戻していた。
瞬間アルトの身体は、その指先を起点にして取り戻されてゆく。
闇の中、編み直されてゆく身体という境界線。
切り取られて目覚めていた。
いや、目覚めたと感じ取っていた。
真っ先に確かめる、そのきっかけとなった指先。
そこにぬるり、とした感触はある。

こすり合わせてアルトはその感触を確かめなおした。
覚えがある。
過ったとたん、興奮剤を投与されたかのように血圧は上がっていた。
血だ。
言葉が脳裏で明滅する。
と、それは指先で固く引き締まっていた。あっという間に手のひらへ張り付く一枚の面へ、姿を変える。面は曲面へとしなり、手のひらに程よく馴染んで冷ややかと貼りついていた。
何がどうしたのか。視線を向けずにはおれない。
周りは変わらず闇だ。だがそうしてうつむいた手元だけが、ほんのり明るいことに気づいていた。いつしかそこだけがシミ抜かれたように闇は切り取られると、先ほどから触れているものをのぞかせている。
ケースだ。
筒状にしつらえられた、それはアクリルで出来た筒状のケースだった。透明のその中には、布をかけられ横たわる何者かが見て取れる。覆い切れなかった布の端からは、尖った靴先もまた覗いていた。

確かめアルトは、ケースへ視線を這わせる。
と耳へ罵声は唐突なまでに投げ込まれていた。
『あいつが裏切ったんだ！』
他に誰かいたなどと思いにもよらず、アルトは度肝を抜かれて顔を跳ね上げる。瞬間、手元の光が魚眼レンズを覗いたがごとく周囲へ広がっていった。一気にアルトを包み込むと、放り込んで世界を反転させる。それまであった静けさは遠く果てへ吹き飛び、刺激の洪水がアルトの目の前をチカチカさせた。
鳴り響く警報音。
重なって繰り返される機械的なアナウンスの声。
船内なのか、極端に狭い通路は点滅を繰り返す警告灯にコマ落とされ、実際の距離をひどくつかみにくいものに変えている。そして何よりけたたましいのは、ケースを乗せて潰れそうに軋むストレッチャーの音だ。息せき切って床を打ち鳴らす自らの靴音も、カンに障って仕方がない。アルトはいつしか触れていただけのケースを力いっぱいに押すと、その光景の中を懸命に走り抜けていた。
『こうなれば残りの合流は無理だ！』
あの声は言う。放つ人物は真正面にいた。進行方向に半ば背を向ける格好で、アル

ト同様ケースへ手をかけ、こちらを向いて引っぱっている。
『筒抜けなら、艇には乗れない！』
言われてアルトは、そう怒鳴り返していた。
『二人なら……』
彼が言いかける。瞬間、その顔が殴りつけられたかのごとく、あらぬ方向へ振れた。
着弾だ。
『トパル！』
叫ぶ。
食い込んだ炸裂弾が、次の瞬間にもトパルの脳髄を木っ端微塵と吹き飛ばしていた。避けてアルトは反射的に手をかざす。音を立て、あのぬるりとした感触は指へはりつき、トパルの体が丸太のように倒れて転がった。勢い余ったストレッチャーはそこへ乗り上べると、それきりバランスを崩してよれるように倒れる。押さえ込み切れずねじ伏せられて、アルトも床へ身を投げ出していた。
『統制の本格的な足がかりとします』
床の向こうから、声。
いや、もうそれは床ではない。三重にも引かれた厳重なウィルスカーテンだ。声は

その向こうから聞こえていた。
『非言語支配の幕開けですか』
『あの影響力で、極Ｙの動話がそのヒントを与えてくれました』
『皮肉なものですな。彼らが主要二十三種に名を連ねていれば、これほど大事にはならなかったものを』
『冗談を。強すぎる影響力など劇薬そのものです。扱うに神経を使うだけの厄介ものに過ぎません。我々にはコントロールできる程度の毒があれば十分なのです。それ以外は排除します。トニックのような騒ぎは、もう結構ですから』
『確かに。しかしＦ７の者は、イルサリ症候群の治療に関する研究だと信じ込んでいる様子ですが、彼らへの隠ぺいもそろそろ限界では？　今後、彼らには何と？』
『しょせん短命なヒトには、わかり得ない論理です。説明する必要も、説得する必要もありません。彼らにはせいぜい個を救ってもらえば、それでいいではありませんか。我々主要二十三種は定義できないそれら生命よりも、その現象として確実に存在するこの世界の存続につとめるだけです。この世界がなくてはまた、不確実な個でさえも、その存在が危ぶまれるのですからね』
『了解しました。ところで、近く行われる臨床実験には同席されるご予定で？』

『完成したのなら、息抜きにはちょうどいい演奏会となることでしょう』
と、聞き入っていたアルトの肩を何者かが叩く。
『おい、気をつけろ。そのカーテンはきつすぎるぞ。面の皮が剥がれるぜ』
まるで盗人のように驚いて、アルトは振り返っていた。
『いや、パスの再発行を……』
が、そこには先ほどまで懸命に押していた、あのアクリルケースが横たわっている。
声の主は見当たらない。
いつしかアルトは、立ち並ぶ端末に埋め尽くされた部屋の中にいた。足元を大蛇のごとく這い回るケーブルが埋め尽くし、傍らに極Ｙの通信機、プラットボードも開き置かれている。散らかった仮想デスクは取り止めのないメモを記したホログラムを雑然と周囲に立ち上げ、主の活動を知らしめていた。
そして静寂。
あの話し声も何も、何も聞こえてはこない。時折、端末が、この部屋の鼓動のように低く機械音を響かせ、それにあわせてプラットボード上の極Ｙ映像が、しなやかと動話を綴り続けるのみだ。
見回しアルトは、恐る恐る足を進めた。

真っ先に、倒れ掛かってきたあのアクリルケースの中を覗き込む。
カラだ。
開かれたケースは、そこに横たわっていただろうモノの窪みを残して、あざわらうかのようにアルトを見上げていた。意味もわからぬまま、分からぬものにほっとしてアルトは胸をなでおろす。そしてまるでずっとそこにいたかのように、背後の椅子を引き寄せ、どっかと腰を落とした。瞬間、言葉は口から飛び出す。
『イルサリ。ここでは禁止したハズだ』
その突飛とも思えた言葉に間髪入れず答えを返してきたのは、合成音声だった。

申し訳ありません。定刻の覚醒問診を行った際、出て行かれてしまったようで

聞いてアルトは立ち上がる。
端末の一角へ歩み寄った。
その電圧を切る。
スモークのかけられていた一角に、覗き窓のついたドアは浮かび上がった。と同時に、かすかに漏れ聞こえる柔らかな音階が、遠くくぐもった音でアルトの鼓膜をくす

ぐり始める。歩み寄り、寄りかかるようにしてアルトは窓へとその顔を近づけた。
向こうに開けた部屋は四メートル四方ほど。中央には、アンプのような機材が数個、置かれている。華奢な背中は、そこに腰かけていた。見つめるアルトの視線に気づいたか、すぐにもねじれて振り返る。
みつかっちゃった。
ドアのせいで声は聞こえはしなかったが、はっきりそう口が動いていた。首から楽器をさげたネオンはそこで、悪戯げな笑みを浮かべてみせる。
声を上げ、跳ね起きていた。
闇雲に振り回した腕が何かを倒す。
神経質な音が床で弾けていた。
かまうことなくアルトは両目を見開く。
そこに掃きためられたような生活備品は、山と積み上げられていた。囲って、使い込んだ分、黄ばんだように見えるベージュ色の壁が立ち塞がっている。作り付けのロッカーとほぼ同じ外見のバスブースが並び、離れてポツンと貧相な丸テーブルが平衡感覚も危げに固定されていた。そんなテーブルと向かい合うように据えられた調理台には、日々の酷使を訴えて焦げがこびりついている。

それ以外、誰の姿もなかった。
ただ寝息がごとく空調は穏やかに作動し、そのかすかな音でもってして周囲の静けさを強調する。間違いなく停泊中の船の中、アルトは後付された居住モジュールにいた。当然といえば当然だ。そのハッチに腰掛け、ライオンの放つメッセージを聞いていたのである。よもや地面へ吸い込まれるなど、体が闇に溶け入るなど、現実に起きるハズなどなかった。
幻だ。
永らく忘れ去っていた、興奮剤の幻覚。
だが幻を見た、ということだけは事実だった。その証拠に葬り去ったはずの記憶は、思い出すなどという言葉ではあまりにも生ぬるい勢いで、アルトの中へ怒涛のごとくまき散らされている。
確かに記憶を管理しているのは脳そのものだろう。だが管理されている記憶とは、そこに隷属する肉体の受けた刺激によって構成された概念の総体である。ライオンの運んだ声をきっかけに、それら肉体に書き込まれた感覚の記憶を、どうやら一息に体験しなおした様子だった。言い換えるなら感覚記録のローディングか。しかも耐えうる限り最大、かつ最速のローディングだ。おかげで伴う感情のアップダウンは激しか

った。そしてそれらは、以降、積み上げてきた記憶ともまた、噛み合わずにせめぎ合う。

怒り。
希望。
憎しみ。
疑念。
決意。
自信。
恐れ。
不安に満ちた迷いと、ささやかな愛情。
そして芽生えたばかりの我。
詰め込み膨張した頭をアルトは、両手で抱えた。
苦虫を噛み潰すかのように、ギリリ、こめかみを窪ませる。
刹那、ありったけの声を吐き出した。いや、それは叫び声に近かったやもしれない。
自分でも驚くほどの大声だった。忘れ去っていたアルトでありアルトでない世界の記憶と感覚、感情の全てを切り離す。

叫び終えた喉がひりひり、痛んでいた。
痛みが今、ここに在る己が誰かをより確かなものへ、変えてゆく。
途方もなく疲れたときのように脳の芯が痺れていた。紛らせ、抱えていた両手でアルトは何度も乱暴に頬を拭う。強張ったままの肩を掴み、揉みほぐして大きく一息、吸い込んだ。
ようやく顔を持ち上げる。
慣れ親しんだ部屋は、それこそが心遣いだといわんばかりだ。何変わることなく涼しげにアルトを包み込むと、すまし顔でたたずんでいた。あまりの肩透かしに呆けて見回せば、寝かされていたマットレスへ投げ出していた足が、他人のもののように視界に映りこんでくる。
おそらく、ここへ担ぎ込んだのはライオンだろう。
靴すら履いたきりの足を自分のものにすべく、アルトは重い体を捻り床へ足を下ろしてみる。違和感は、そのとき靴底から伝わっていた。
何か踏みつけたようだ。
自然、視線は落ちていた。確かめゆっくり、靴先をねじる。床の上を滑らせたなら靴底から流れ星のごとく尾を引いて、『アーツェ』独特の細かい砂塵は現れた。どう

やら跳ね起きた拍子に倒したのはコレだったらしい。傍らにはまだ半分ほど中に砂塵を残したガラス瓶もまた、転がっている。砂塵は踏みつけた場所以外にも点々と散らばり、またひとつ後片付けが増えたと、アルトは瓶へ手を伸ばした。拾い上げようとして、動きを止める。

瓶の中、砂塵に何かは埋もれていた。それは雑然としたこの部屋に似つかわしくないほど、艶やかな色味のものだった。瓶を拾い上げるより先、興味津々、アルトはそれをつまみ出す。目の高さへ持ち上げていった。覚めてすぐ目にするにはあまりにビビッドな赤とオレンジは、そんなアルトの眼を刺す。人工的なまでに発色鮮やかだ。拾い上げていたのは、『アーツェ』の花だった。

よもやこんな所にあるハズもない花に不意をつかれて、至極単純に美しいと心の中で呟いてみる。そして誰が一体こんなところへと自らに疑問を投げかけ、よもやあのライオンがと想像して、今度はまさかと削げた頬で一人、笑った。そんな少女趣味なら、そうなる予定に胸躍らせているデミの方が至極妥当だ、とさえ思い直す。

とたん存在は、脳裏へ浮かび上がっていた。

弾かれたかのごとくマットレスから立ち上がる。

浮かんだままに追いかけ、居住モジュールの薄いドアを体当たりでスライドさせた。

通路を船首へ向かう。
さなか、聞こえてきたのは柔らかなあの音階だ。
これもまた、記憶の続きなのか。
手繰り寄せ、簡素なスチール階段へ通路を折れた。
踏み外しそうになりつつ駆け降りる。
正面突き当たり、狭い踊り場を挟んだハッチは開け放たれたままだった。うっすら積もった砂塵越し、ドックの天窓から降り注ぐアメ色の光が、連なる世界を赤く塞いでいる。柔らかい音色は、そんな光の向こうから聞こえていた。
それは自らが蒔いた種だ。
辿りつき、目を細め、アルトはハッチの縁へ手を掛ける。
膨張する光を突き破り、一思いに船から身を踊らせた。
停められた三輪ジープの位置は、最後に見た時と変わらない。
しかしながらその荷台に何者かの影は揺れている。
同じ背中だ。
背中はすぐさま視線を、いや、船から飛び降りたアルトに驚き、振り返っていた。
ネオンの目がアルトをとらえる。

ただそれだけだ。
ただそれだけのために、全ては目に見えぬほど鈍磨なスピードで回転を続けていた。
「な、なに？　そんなに勢いよく飛び出してきて。顔、怖い」
荷台から立ち上がったネオンは言い、すぐさまこうもつけ加える。
「でもその様子じゃもう、大丈夫みたい」
肩をすくめてまた笑った。
「って、わたしの話、聞いてる？」
アルトの焦点を探ると手を振る。
言われてようやく、アルトは目をしばたたかせていた。
反応が返ってきたことに、ネオンはひとまず安心した様子だ。
「デミと町から帰ったら、ライオンがメッセージの再生を始めたとたんにあなたがひっくり返ったって大騒ぎしてたのよ。で、ビオモービルでデミにサスを呼びに戻ってもらったのに、サスは今、あなたを病院に運ぶのはマズいって言い出して、それからまる一日かしら。あなた、眠り続けてた。って、ちょっと、聞いてる？」
眉をひそめ、今度は渋い顔を突き出す。
「あ、ああ……。さっきの音は、お前なのか？」

あやふやに答えてアルトは、確かめた。
「そうよ。別にタダ聞きだ、なんていいませんから」
素直に頷き返したネオンは、すぐさま憎たらしげな表情を反転させる。
「それよりも安心して！　靴代を返せるメドは立ったわ。デミが案内してくれたレストランで明日の夜、演奏させてもらえることになったの。さっきのはその準備。ラッキーよねあたし。ケースはフェイオンにおいてきちゃったし、楽器につけてたリードは振り回し過ぎてもう使い物にならにくらいボロボロだったけど、一枚だけ予備のリード、ポケットに入れてたのよね。船賃も合わせて利子つけて返してあげるわ」
反らす胸の上で、青い瞳がきらきら輝く。
「他はどうしている？」
目もくれず、アルトはたたみかけていた。
ならすかされたことが不満らしい。答える前に、ネオンは唇を尖らせる。
「ライオンは予定していたドックじゃ船が納まりきらないらしくって、新しいドックを探しに出てる。デミは明日の打ち合わせとＰＲ活動中。サスは仕事が忙しいみたい、あれから連絡もないわ。だからわたしがお留守番ってワケ」
言って視線をアルトの手元へ向けた。

「あー、ちょっと、花、もいできちゃってるじゃないっ。記念にもらってきたところなのに」
言われて初めてアルトは握ったままのソレに気づく。
「起きた時に倒した」
どうにも弁解の余地はない。ならばむげに責められないと諦めたか、ネオンは首をかしげていた。
「何か、食べられそう？」
脈絡がつかめない。アルトはすぐさま答えかねて口をつぐむ。
「まだフラついてるようだから作ってあげる。っていっても、そっち持ちのミールパックを温めなおすだけだけれどね」
なら笑いはここでも悪戯げとアルトをとらえていた。
断る理由がまるで思いつかない。ゆえに連れ立ち居住モジュールへ戻る。最中、ネオンは丸一日、眠り込んだアルトの原因を探してあれやこれやと質問を投げかけていた。くどさにかまうなと言いかけアルトは大丈夫だ、と言葉を選びなおす。ただぶっきらぼうな響きだけは拭い去れず、むしろその響きに誰より自分が驚かされていた。
「あのさ、勘違いしないでよね」

浴びせられたネオンこそ、何も知らない。
「あなたを心配して言ってるんじゃないの。いい？　また倒れられちゃったら、あたしはお手上げなの。あなたは時の運だと思ってるかもしれないけれど、あたしはこのチャンスを逃したくないの」
スチール階段の下で一人、憤慨している。そうか、と聞いていて、アルトは登り切ったそこで踵を返していた。
「ちょっとっ、モジュールはこっちでしょ」
呼び止められようとも理由はある。
「先にすませたい用がある」
通路の突き当たり、コクピットへ続く階段手すりを掴んで言い放った。
「ミールパック、何番がご希望っ？」
登り始めた体が見えなくなる前にと、ネオンの張り上げる声は大きい。だがアルトに今、吟味できるほどの興味は持てなかった。
「お前の食べたいヤツにすればいい」
「なによ、ソレ」
見送るネオンが、ぷうと頬を膨らませる。

放って上がったコクピットで、アルトは通信機器へ飛びついていた。
サスは仕事が忙しいらしく連絡がない、とネオンは話している。だがそれが仕事のせいでないことくらい、アルトが一番よく知っていた。サスは約束通り『ラウア』語店員探しに没頭している。だからこそ一刻も早く手を引かせなければと気は早った。
陳腐なもので調べを託したはずが、辿ったその先に何があるのかをもっともよく理解しているのはアルト自身だ。地球へ送りつけられたホロレターを手にしたあの時から妙に落ち着かなかったわけも、サスが調査をかってでた時、思わず食ってかかったわけも、今ならよく分かる。記憶の底でうずき、それが知らせようとしていたに違いなかった。つまり負えないのは、何も知らないサスの方で間違いなく、知らせてアルトは急ぎ通信を手繰る。
だが店は休業中だった。通信は自動受付に切り替えられると、チャート方式で淡々と売買の受付登録をアルトへ促し、諦め過去、サスとのやり取りで使ったことのあるアドレスを片っ端から引っ張り出す。つながるものがあればと呼び出し続け、手ごたえがあったのはそのうちのひとつ、映像を拒否した音声のみのラインだった。
『サス、どこだッ？』
前のめりで、アルトは呼びかける。

『ほ。その声はアルトか？』
　忘れ去られたかのように手入れされていない連邦軍跡地は、長年にわたって吹き込み、堆積した砂塵によってまさに廃墟と変わり果てていた。観光スポットとして出入りのある管制塔は、まだ幾分そうした不気味さからは縁遠いが、サスがもぐりこんだ駐屯本部である建物内は、光も滞りがちと洞窟がごとく別世界を目の前に広げている。その中をサスはひとり、ハンドライト片手にかつての通信中枢へ向かい、昨日ようやく手に入れた電子図面をコンパスかわりに回転させながら進んでいた。
『心配しておったぞ、いつ目が覚めた？』
『そんなことはどうでもいい。ラウア語店員の件からは手を引いてくれ』
　腰からぶら下げた携帯電話より漏れ出すアルトの声は、相も変わらずせっかちで景気がいい。
『その様子じゃと、そら、心配するだけ損じゃったようじゃの』
　笑ってサスは鼻溜を潰す。
『だが、話の噛み合わん要求じゃの』

返した。
『悪い夢でも見おったか？』
『ああ。結構、後引く悪い夢だ』
だというのにアルトは冗談を冗談と、返さない。耳にしてサスは闇に瞳を光らせた。
『それでわしにその提案か。分かりやすいの、まったくお前さんは』
『どういうことだ？』
アルトの声が、何をや警戒して固くなる。
『地球で俺を最初に見つけたのは、あんただ。あんたは一体、俺のどこまでを知っている？』
聞きながらサスは、回転する電子地図に従い四辻を左へ折れた。辺りは暗さを増し、改めハンドライトを周囲へ這わせる。まったく見えなくなった行く先へと、その目を細めた。
『言ったろう。わしがお前を拾ったのは、気まぐれではないと。そしてこの件に共通するのは、連邦の軍じゃと。知っておるのはそれだけじゃ。ただ今のお前さんの狼狽ぶりに、予想しておったことが的中したとは思うとるがな』
鼻溜を揺らし、手元の電子地図へ細めていた目を落とした。目的地はここをまっす

ぐ行ったその先らしい。用のなくなった地図の電源を落とす。サスは背負ったバックグパックの中へ押し込んだ。吹き込み堆積する砂塵へ、足を繰り出す。

『あんたの予想はおおむね外れてないさ。だったら深入りはするな』

アルトが吐き捨てるように言っていた。

なだめてサスは、一息つく。

『いいか。まぁ、聞け』

目的地へ辿り着くまでの間、語って聞かせることにした。

『わしが後払いの仕事をせん理由はの、お前に会う直前だ。取引の相手に騙されたことがきっかけじゃった。奴ら、商品だけ握って、とっととどこかへ失せおったんじゃ。なにせ何度か実績のあった相手じゃったからの。ケタの違う取引だったにもかかわらず、わしもついつい、いつも通りの段取りで済ませてしもうとった。全くもって、わしが甘かったとしかいいようがない失態じゃ』

『もうろくしたかよ、じいさん。そんな話は今、関係ない』

『まぁ、聞かんか。まだ続きがある。しかも取りっぱぐれたその金はの、まんの悪いことにギルド本部へ支払うロイヤリティーへ回す予定での。本部は支払いを待つようなトコロではなかったし、デミの学費もまだまだかさむ。心底、参ったと思ったもん

じゃった。どう切り抜けるかと思案しにくれたほどじゃ。結局、手持ちの品は全て売り払い、使っておったＯｐ・１の店舗も売り払った。だが、それでもまるで足らん。後にも先にも、にっちもさっちもゆかんかったのは、本当にあの時だけじゃったな』

一足ごとに舞い上がる砂塵は、サスのかざすハンドライトの光の中で重力を感じさせぬほどと軽やかに踊っていた。破れたガラスと、外れたドアを幾枚かやり過ごし、サスはようやく『通信室』と造語で書かれた部屋を、ハンドライトの光にとらえる。背中のバックパックを背負いなおすと、まるで登山隊が頂上を目指すかのように、その部屋へ向かい慎重と足を進めていった。

『地球へ向かったのはの、その金策のためじゃ。それでも足りるかどうかは疑問じゃったが、ギルド商人を続けるには船も売ってしまわんことにはムリじゃった。で、最も高値をつけたヒトへ船を届けに向かったんじゃ。なぁに帰りは、もぐりの出稼ぎ船を利用すれば安く帰れる。そうして、お前の家を押し潰すハメにあった。あの時は、このうえ賠償問題まで抱え込むのかと、まったく慌てさせられたもんじゃわい。ところが中には怒鳴り散らすヒトどころか、へべれけのお前が軍用の興奮剤に埋もれてころがっとるだけじゃった。見た瞬間、わしは咄嗟にこう思ったの。こいつはついとる。船は売るのをやめにして、これをさばけばいい額になるハズじゃ、とな。しかもへべ

れけのお前さんは、身ぐるみ剥がされたとして何も気づきはせん』

　そうして前に、通信室のドアは立ち塞がる。サスはゆっくりと、しかしありったけの力を腹にこめ、右足を振り上げた。気合一発。かろうじてドアを蹴り破る。より一層、濃く舞い上がった砂塵が視界を埋め尽くし、さすがの『デフ6』の鼻溜でもってしても、咳き込んだ。サスはしばし砂塵を手で振り払う。

『軍流れのモノはの、質が保証されとるからの、買い手がつくのも早ければ売値も破格じゃ。そのうえお前の抱えておった量は尋常ではなかった。早々に、ひとつ残らず船へ興奮剤を積み込んで、これでなんとか首がつながったと、急に視界が開けた気分になったわ。じゃがの、そうしてお前を放って飛び立とうとした時、わしの良心とかいうヤツが言いおるんじゃ。これではまるで盗人ではないかと。わしから商品だけを奪って消えうせた奴らと同じではないかと。冗談ではない。それだけはゴメンじゃった。わしがあんな奴らと同じじゃと？　いいや、わしは違う。そうじゃ。わしは対価と交換するれっきとしたギルド商人じゃ。お前に命を助けられたようなものなら、わしはお前を助けて対価を支払わねばならん。まぁ、どう見ても軍人に見えんお前が、民間では考えられぬほどのブツを抱えておれば、ワケありなのはギルドでなくとも想像がつく。じゃが、だからと言ってそれが放って立ち去る理由には、ならん』

砂塵は薄くなりつつあった。透かしてサスは、掲げたハンドライトの光で中を覗き込む。

『言っておろうが。あの場所からお前さんを連れ帰ったのは、決して気まぐれなどではないとの。じゃから正気を取り戻したお前さんが記憶がない、などと言い出した時から、こういうことになるだろう心づもりもあった。全ては承知のうえじゃ。手を引けと言われて今さらそうもゆかんことは、これで納得できたろう。え？　アルト』

ぼんやり室内が、浮かび上がった。サスは中へ足を踏み入れる。ほどよい所で担いでいたバックパックを下ろした。そんな腰元の携帯電話から、焦ったようなアルトの声は漏れていた。

『今、どこにいる？　サス？』

『なぁに、手は打ってある。じゃが店の端末を使えばアシがつくかも知れんからの。ここなら安心じゃ』

返すサスの声に、もう安穏とした雰囲気はない。ぴしゃり断言する。思い出したようにこうもつけ加えて鼻溜を振った。

『そうじゃった、ネオンから聞いておるぞ。今後の商売の参考までに、わしも一度はアナログ楽器の音を聞いてみたいの。ともかく、明日の演奏には間に合うよう帰る。

お前は期待してまっとれ』
『相手は、じいさんのッ』
アルトの声がよりいっそう甲高くなる。聞くだけ無駄だと、サスはそこで電源を切った。床へ屈みこみ、降り積もった砂塵を集め小山を作る。ハンドライトをその頂上へ突き刺し、即席のスタンドに変えた。その手で勢いよくバックパックの口を開く。

途切れた通信に、アルトは行き場を失った言葉を飲み込む。
サスの居場所を想像することは容易かった。だが容易いだけに挙げればキリがなく、すぐさまそれは分かっていないのと同じ状態に陥る。店以外の端末など、サスの持つ情報源はこの町にも、宇宙にも、『アーツェ』の砂の数ほど存在していた。
接続先をなくした通信は、さきほどから雑音ばかりをひた流している。叩きつけるようにしてアルトは、それを切った。すかさず覚えのあるラインを開くべく、スロットル脇のカーソルへ手を伸ばす。その相手こそ『約束』を果たした彼だ。今ここで援護を頼めるとすれば、相手は彼しかいないように思えてならなかった。だがすぐにも動きは止まる。

なぜなら、彼は間違いなく監視下に置かれている。だからしてライオンは『カウンスラー』の音窟で待ち伏せていた船賊に追われた。ならば彼に連絡を取ることはすなわち、自らの存在を追跡者へ知らせることになりかねない。援護どころかそれこそが最も危険な行為だった。

弾きかけていた端末から手を引く。

前のめりになっていた体をゆっくり、起こしていった。

願わくば、サスのもくろみがカラ振りに終わることを祈るしかない。アルトは舌打つ。ネオンがわめくトラがどうのという前に、少しでも早くここを離れなければと考え、黙した。

いや、それとも？　と、自分へ投げかける。

宇宙は広い。

だが、既知宇宙は狭い。

サスが言った通りだ。逃げおおせるにも限界があった。ならば選択肢は、相変わらずシンプル極まる二者択一で提示されている。だがシンプルゆえ拭えない合理さはいまだ飲み込めず、アルトの感情を逆なでていた。選択しきれず、思考が煮詰まる。振り切り下層をめざしかけ、後ろ髪を惹かれるかのように座席へ振り返っていた。目に、

背もたれへ貼り付けたままのスタンエアは映り込む。飛びつくように剥ぎ取っていた。装填状態を確かめ、安全装置を掛けなおす。すかさず腰のベルトへ挟み込み、丸見えのそれを、引きずり出した衣服で手早く覆った。気付けば頬が硬直している。ピシャリ、叩きつけた。まるで盗人のごとくアルトは周囲を見回し、今度こそ階段を駆け降りてゆく。匂いが通路にまで漂っていた。辿りアルトは、居住モジュールのドア前に立つ。妙に鈍い感知器が、間を空けドアをスライドさせていた。気付いて調理台の前、平行感覚の危ういテーブルの向こうでネオンは振り返る。

「用は済んだ？」

重なり、傍らでチンと電子レンジが音を立てていた。電熱コイルのコンロの焦げたような熱臭さもまた、鼻について止まない。

「二十八番か」

かぎ分けアルトは、選択を任せたミールパックのナンバーを口にしていた。

なら唐突に歌い出したのはネオンだ。

「夜の街にガオー、ビルのハイウェイにガオー」

調子はいいのだが、いかんせん脈絡がない。

「なん、だ？　それは」

不気味さばかりが際立ち、アルトは眉をひそめる。なら電子レンジのドアを開けたネオンは、歌いながらおおよそ食べ物が入っているとは思えない工業的なデザインのパックを中から取り出し言った。

「鉄人２８号のテーマソング」

先ほどまで首から提げられていた楽器は、陣取っていたアルトに代わり壁際のマットレスに寝かされている。ひっくり返したハズの砂塵もすでに片付けられ、砂塵に埋もれたオレンジ色の花が枕元で、何事もなかったかのように四枚の花びらを広げていた。

「答えになってない」

アルトは突き返す。

「地球ローカルの、二次元まんが。古いのよ、すっごく。あなた、何番でもいいっていったじゃない。だからあやかって、鉄のヒトの二十八番にしてみました」

手を休めることないネオンは得意げだ。

『アーツェ』への道中、仮死ポッドで眠っていたライオンをのぞくそれぞれは、コクピットやマットレスで代わる代わる食事を済ませていた。だが楽器が占拠しているそこに代わって、いい加減、腰掛けられそうなモノを探す時がきたらしい。そぞろに

アルトはモジュールの片隅にうず高く積まれた備品の山と対峙する。
「中身はご存知の通り、ボルシチとロシアパンだから安心でしょ」
背でネオンが、パックの口を切り取りながら声を高くしていた。言った通りのロシアパンを、湯気もろとも引っ張り出す。
「そんな歌、一体、どこで覚えたんだ？」
備品の山をガラガラ、かき分けながらアルトは問うた。電熱コンロから片手ナベもまた引き上げたネオンは、手際よく中身を皿へ移し変えつつ肩をすくめてみせる。
「あのね、ログジャンキーなんて前世紀のマニアを相手にしてると、とんでもない骨董品と出会うことだってあるの。あたしが月へ演奏に行った時、そのヒト、磁気テープのメディアなんて持ってたのよ。信じられる？　その中に鉄人２８号があったわけ。演奏が終わった後は、延々とその講義、受けちゃったんだから。おかげで歌を覚えたわ。お付き合いするの、ものすごく大変だったんだから」
聞きながら、不精で捨て損ねた紙媒体と、絡んだ寝具の間からアルトはスツールを引っ張り出す。つられて『フェイオン』を脱出して以降、どこへやったのかと探し続けていた地球基準の二十四時間時計は転がり出し、それもまた拾い上げてテーブルへ戻った。

据え置き、またぐようにしてスツールへ腰を下ろす。絶妙のタイミングでその前に、皿は出されていた。盛られたボルシチがテーブルの傾きを如実に表し、見事に楕円の喫水線を引いている。見下ろし、邪魔にならない位置へアルトは二十四時間時計を置いた。時刻に狂いがないことを確かめたなら、遮りパンの皿は視界へ差し込まれてくる。

意識していたよりも腹の減り具合は、深刻だったらしい。そんな皿がテーブルへ触れるより先、アルトは時計を置いたその手でひとつ、掴み上げていた。

「いつからそんなことを？」

勢いよくかぶりつき、残りをボルシチに浸して視線を上げる。フォークを差し出したネオンはそこで、困ったような顔を向けていた。

「サスのお店で言ったわよね。放置船から見つけ出されて蘇生されたって。その直後のことは時間の感覚があいまいなの。そうね、はっきり覚えているのは、ここ二年くらいってとこかしら？」

フォークを受け取る。

「それ以前は、なにを？」

ネオンの表情は明らかに、そこでくもった。

「それが、全然……、思い出せないのよね」
　呟き、失敗が見つかった時のように舌を出す。
「名前はその時、入っていた仮死ポッドに刻まれてたものよ。本当は覚えてないわ。靴にこだわるのも、その時から履いていたわたしの証拠だから。楽器だってそう。わたしの持ち物ってちょっと変わってるじゃない。コレ、自分を探す目印なんじゃないかって思ってるの。変えなければ絶対、誰かがあたしのことを見つけてくれるハズだって」
　だが、ネオンの声が弾んでいたのもそこまでだった。不意にうつむき離れてゆく。目で追えば、崩したばかりの備品の山の前に立った。やおら屈み込み、手持無沙汰を紛らせ勝手とより分け始める。だからして作業は始まったばかりだ。だがその後に続く声はひどく疲れて、アルトの耳へ届いていた。
「……って、この間まで考えてたのよね」
　聞きながらアルトは、フォークで刺したイモを口へ放り込む。
「けど、死人に呼び出されるなんて、こういうの、年貢の納め時っていうのよね。もう諦めなきゃいけないのかなって思ってる」
「死人？」

噛み潰して繰り返した。
「フェイオンの仕事、依頼人はドクターイルサリを名乗ってた」
備品の山を丁寧に整理してゆくネオン手は、止まらない。拾った紙媒体をめくっては傍らに積み上げ、反対側へてんでバラバラなデザインの雑貨や食器を並べてゆく。
「そいつはつまらねぇイタズラだ」
一蹴してアルトは、口の中へパンを詰め込んだ。
「十分よ」
言い切ったネオンの手は、そこで止まる。
「だから決めたの。延々、誰も見つけてくれないってことは、本当は誰も探してないってことだって。何をしたのかはわからない。けど、きっとあたしは追い出されたんだと思うわ。ギルドの下で演奏をしていたら、いつか誰かが見つけてくれると信じていたけど、そんな過去にしがみつくのはもうやめようって。そろそろ帰らないで、行くべきだって決めたの」
思い出したように、寝具を引っ張り出す。見えない場所で引っかかるそれとしばらく格闘し、立ち上がってネオンは適当な大きさにたたんでいった。と、その間からもバサリ、紙媒体は落ちてくる。ページを広げてうつぶせとなったそれをネオンは拾い

上げた。
パラパラとめくる。
「忘れた時間に、さようならしようって」
呟きははっきりアルトの耳に響いていた。
「あたしは、新しいあたしになる」
ボルシチをすくい上げていたアルトはその手を、思わず止める。
なら見えていたかのようにネオンは声を跳ね上げ、振り返っていた。
「……で、さっ！」
不意を突かれてついぞアルトはその目を瞬かせる。
「さっきから思って　放って上がったコクピットで、アルトは通信機器へ飛びついていた。
サスは仕事が忙しいらしく連絡がない、とネオンは話している。だがそれが仕事のせいでないことくらい、アルトが一番よく知っていた。サスは約束通り『ラウア』語店員探しに没頭している。だからこそ一刻も早く手を引かせなければと気は早った。
陳腐なもので調べを託したはずが、辿ったその先に何があるのかをもっともよく理解しているのはアルト自身だ。地球へ送りつけられたホロレターを手にしたあの時か

ら妙に落ち着かなかったわけも、サスが調査をかってでた時、思わず食ってかかったわけも、今ならよく分かる。記憶の底でうずき、それが知らせようとしていたに違いなかった。つまり負えないのは、何も知らないサスの方で間違いなく、知らせてアルトは急ぎ通信を手繰る。

だが店は休業中だった。通信は自動受付に切り替えられると、チャート方式で淡々と売買の受付登録をアルトへ促し、諦め過去、サスとのやり取りで使ったことのあるアドレスを片っ端から引っ張り出す。つながるものがあればと呼び出し続け、手ごたえがあったのはそのうちのひとつ、映像を拒否した音声のみのラインだった。

『サス、どこだッ？』

前のめりで、アルトは呼びかける。

『ほ。その声はアルトか？』

忘れ去られたかのように手入れされていない連邦軍跡地は、長年にわたって吹き込み、堆積した砂塵によってまさに廃墟と変わり果てていた。観光スポットとして出入りのある管制塔は、まだ幾分そうした不気味さからは縁遠いが、サスがもぐりこんだ

駐屯本部である建物内は、光も滞りがちと洞窟がごとく別世界を目の前に広げている。その中をサスはひとり、ハンドライト片手にかつての通信中枢へ向かい、昨日ようやく手に入れた電子図面をコンパスかわりに回転させながら進んでいた。
『心配しておったぞ、いつ目が覚めた？』
『そんなことはどうでもいい。ラウア語店員の件からは手を引いてくれ』
腰からぶら下げた携帯電話より漏れ出すアルトの声は、相も変わらずせっかちで景気がいい。
『その様子じゃと、そら、心配するだけ損じゃったようじゃの』
笑ってサスは鼻溜を潰す。
『だが、話の噛み合わん要求じゃの』
返した。
『悪い夢でも見おったか？』
『ああ。結構、後引く悪い夢だ』
だというのにアルトは冗談を冗談と、返さない。耳にしてサスは闇に瞳を光らせた。
『それでわしにその提案か。分かりやすいの、まったくお前さんは』
『どういうことだ？』

アルトの声が、何をや警戒して固くなる。
『地球で俺を最初に見つけたのは、あんただ。あんたは一体、俺のどこまでを知っている？』
聞きながらサスは、回転する電子地図に従い四辻を左へ折れた。辺りは暗さを増し、改めハンドライトを周囲へ這わせる。まったく見えなくなった行く先へと、その目を細めた。
『言ったろう。わしがお前を拾ったのは、気まぐれではないと。そしてこの件に共通するのは、連邦の軍じゃと。知っておるのはそれだけじゃ。ただ今のお前さんの狼狽ぶりに、予想しておったことが的中したとは思うとるがな』
鼻溜を揺らし、手元の電子地図へ細めていた目を落とした。目的地はここをまっすぐ行ったその先らしい。用のなくなった地図の電源を落とす。サスは背負ったバックグパックの中へ押し込んだ。吹き込み堆積する砂塵へ、足を繰り出す。
『あんたの予想はおおむね外れてないさ。だったら深入りはするな』
アルトが吐き捨てるように言っていた。
なだめてサスは、一息つく。
『いいか。まぁ、聞け』

目的地へ辿り着くまでの間、語って聞かせることにした。
『わしが後払いの仕事をせん理由はの、お前に会う直前だ。取引の相手に騙されたことがきっかけじゃった。奴ら、商品だけ握って、とっととどこかへ失せおったんじゃ。なにせ何度か実績のあった相手じゃったからの。ケタの違う取引だったにもかかわらず、わしもついつい、いつも通りの段取りで済ませてしもうとった。全くもって、わしが甘かったとしかいいようがない失態じゃ』
『もうろくしたかよ、じいさん。そんな話は今、関係ない』
『まぁ、聞かんか。まだ続きがある。しかも取りっぱぐれたその金はの、まんの悪いことにギルド本部へ支払うロイヤリティーへ回す予定での。本部は支払いを待つようなトコロではなかったし、デミの学費もまだまだかさむ。心底、参ったと思ったもんじゃった。どう切り抜けるかと思案しにくれたほどじゃ。結局、手持ちの品は全て売り払い、使っておったＯｐ・１の店舗も売り払った。だが、それでもまるで足らん。後にも先にも、にっちもさっちもゆかんかったのは、本当にあの時だけじゃったな』
一足ごとに舞い上がる砂塵は、サスのかざすハンドライトの光の中で重力を感じさせぬほどと軽やかに踊っていた。破れたガラスと、外れたドアを幾枚かやり過ごし、サスはようやく『通信室』と造語で書かれた部屋を、ハンドライトの光にとらえる。

背中のバックパックを背負いなおすと、まるで登山隊が頂上を目指すかのように、その部屋へ向かい慎重と足を進めていった。

『地球へ向かったのはの、その金策のためじゃ。それでも足りるかどうかは疑問じゃったが、ギルド商人を続けるには船も売ってしまわんことにはムリじゃった。で、最も高値をつけたヒトへ船を届けに向かったんじゃ。なぁに帰りは、もぐりの出稼ぎ船を利用すれば安く帰れる。そうして、お前の家を押し潰すハメにあった。あの時は、このうえ賠償問題まで抱え込むのかと、まったく慌てさせられたもんじゃわい。ところが中には怒鳴り散らすヒトどころか、へべれけのお前が軍用の興奮剤に埋もれてころがっとるだけじゃった。見た瞬間、わしは咄嗟にこう思ったの。こいつはついとる。船は売るのをやめにして、これをさばけばいい額になるハズじゃ、とな。しかもへべれけのお前さんは、身ぐるみ剥がされたとして何も気づきはせん』

そうして前に、通信室のドアは立ち塞がる。サスはゆっくりと、しかしありったけの力を腹にこめ、右足を振り上げた。気合一発。かろうじてドアを蹴り破る。より一層、濃く舞い上がった砂塵が視界を埋め尽くし、さすがの『デフ6』の鼻溜でもってしても、咳き込んだ。サスはしばし砂塵を手で振り払う。

『軍流れのモノはの、質が保証されとるからの、買い手がつくのも早ければ売値も破

格じゃ。そのうえお前の抱えておった量は尋常ではなかった。早々に、ひとつ残らず船へ興奮剤を積み込んで、これでなんとか首がつながったと、急に視界が開けた気分になったわ。じゃがの、そうしてお前を放って飛び立とうとした時、わしの良心とかいうヤツが言いおるんじゃ。これではまるで盗人ではないかと。わしから商品だけを奪って消えうせた奴らと同じではないかと。冗談ではない。それだけはゴメンじゃった。わしがあんな奴らと同じじゃと？　いいや、わしは違う。そうじゃ。わしは対価と交換するれっきとしたギルド商人じゃ。お前に命を助けられたようなものなら、わしはお前を助けて対価を支払わねばならん。まぁ、どう見ても軍人に見えんお前が、民間では考えられぬほどのブツを抱えておれば、ワケありなのはギルドでなくとも想像がつく。じゃが、だからと言ってそれが放って立ち去る理由には、ならん』

　砂塵は薄くなりつつあった。透かしてサスは、掲げたハンドライトの光で中を覗き込む。

『言っておろうが。あの場所からお前さんを連れ帰ったのは、決して気まぐれなどではないとの。じゃから正気を取り戻したお前さんが記憶がない、などと言い出した時から、こういうことになるだろう心づもりもあった。全ては承知のうえじゃ。手を引けと言われて今さらそうもゆかんことは、これで納得できたろう。え？　アルト』

ぼんやり室内が、浮かび上がった。サスは中へ足を踏み入れる。ほどよい所で担いでいたバックパックを下ろした。そんな腰元の携帯電話から、焦ったようなアルトの声は漏れていた。

『今、どこにいる？　サス？』

『なぁに、手は打ってある。じゃが店の端末を使えばアシがつくかも知れんからの。ここなら安心じゃ』

返すサスの声に、もう安穏とした雰囲気はない。ぴしゃり断言する。思い出したようにこうもつけ加えて鼻溜を振った。

『そうじゃった、ネオンから聞いておるぞ。今後の商売の参考までに、わしも一度はアナログ楽器の音を聞いてみたいの。ともかく、明日の演奏には間に合うよう帰る。お前は期待してまっとれ』

『相手は、じいさんのッ』

アルトの声がよりいっそう甲高くなる。聞くだけ無駄だと、サスはそこで電源を切った。床へ屈みこみ、降り積もった砂塵を集め小山を作る。ハンドライトをその頂上へ突き刺し、即席のスタンドに変えた。その手で勢いよくバックパックの口を開く。

途切れた通信に、アルトは行き場を失った言葉を飲み込む。
サスの居場所を想像することは容易かった。だが容易いだけに挙げればキリがなく、すぐさまそれは分かっていないのと同じ状態に陥る。店以外の端末など、サスの持つ情報源はこの町にも、宇宙にも、『アーツェ』の砂の数ほど存在していた。
接続先をなくした通信は、さきほどから雑音ばかりをひた流している。叩きつけるようにしてアルトは、それを切った。すかさず覚えのあるラインを開くべく、スロットル脇のカーソルへ手を伸ばす。その相手こそ『約束』を果たした彼だ。今ここで援護を頼めるとすれば、相手は彼しかいないように思えてならなかった。だがすぐにも動きは止まる。
なぜなら、彼は間違いなく監視下に置かれている。だからしてライオンは『カウンスラー』の音窟で待ち伏せていた船賊に追われた。ならば彼に連絡を取ることはすなわち、自らの存在を追跡者へ知らせることになりかねない。援護どころかそれこそが最も危険な行為だった。
弾きかけていた端末から手を引く。
前のめりになっていた体をゆっくり、起こしていった。

願わくば、サスのもくろみがカラ振りに終わることを祈るしかない。アルトは舌打つ。ネオンがわめくトラがどうのという前に、少しでも早くここを離れなければと考え、黙した。

いや、それとも？　と、自分へ投げかける。

宇宙は広い。

だが、既知宇宙は狭い。

サスが言った通りだ。逃げおおせるにも限界があった。ならば選択肢は、相変わらずシンプル極まる二者択一で提示されている。だがシンプルゆえ拭えない合理さはいまだ飲み込めず、アルトの感情を逆なでていた。選択しきれず、思考が煮詰まる。振り切り下層をめざしかけ、後ろ髪を惹かれるかのように座席へ振り返っていた。目に、背もたれへ貼り付けたままのスタンエアは映り込む。飛びつくように剥ぎ取っていた。装填状態を確かめ、安全装置を掛けなおす。すかさず腰のベルトへ挟み込み、丸見えのそれを、引きずり出した衣服で手早く覆った。気付けば頬が硬直している。ピシャリ、叩きつけた。まるで盗人のごとくアルトは周囲を見回し、今度こそ階段を駆け降りてゆく。たんだけれど。率直に聞いていいかしら？」

そんなネオンに先ほどまでの雰囲気は微塵もない。とどまった動きを再開させてア

ルトは最後のイモを押しこみ、先を促した。なら問うネオンに屈託はない。
「あなたってさ、胸の大きな女の人が好みなわけ？　さっきから出て来るの、そんなのばっかなんだけど」
思わず口の中のものを噴き出しそうになって、アルトはどうにか踏みとどまる。
「あッ、あのなッ、それ以上勝手に人の持ち物、触るなッ」
唸るしかない。
気にすることなくただネオンは、傍らに完成された雑誌の山へ手元のそれも積み上げ、呟いていた。
「よし。だったら同じ船でも安全か、わたし」

『社長、どうしたでやんすか？』
逃げるがごとく遺体安置所を抜け出したスラーとモディーは、立ち上げの済んだ霊柩船のコクピット内、艦橋の指示に従い白い船の格納庫を後にしようとしていた。さなか片目で正面をとらえながらもう片方の目でスラーを見つめるモディーは実に器用で、ままに怪訝と問いかけていた。

『どうしただと？』
開きゆく格納庫のハッチの向こうへ慎重に船体を滑らせながら切り替えすスラーの言葉は、どこか上ずっている。
『なに寝ぼけたこと言ってやがる。サスに直接、話を聞きに行くに決まってるだろうが』
だがそこには、理屈というものがまったく通っていなかった。
『今さら……で、やんすか？』
さすがのモディーも気づいて、おそるおそる口を挟む。
瞬間、スラーの腕は唸った。
モディーの額で鋭い音は鳴る。
『う、うるさい』
どうやらかなり痛いところを突かれたらしい。吐き捨てたはずの声も、こもりがちだ。
『モディーはうるさかったで、やんす』
にもかかわらず目を回しつつ復唱するモディーのそれはもう、ある種の芸である。
『分かったなら、それでいい』

体裁保ち、スラーはただ前を見据えた。
『ワケありとはいえ、無いもの探しがもとより承知の依頼なら、こちとらとんだ囮だぞ』
吐き捨てる。そう、安請け合いは値するだけの信用があってこそだ。だがこれでは元も子もなかった。いや、投げてよこしたサスにこそ何があったのか、と不安がスラーをとらえる。
いつしか霊柩船の四角いアクリルから離艦のガイドラインは消え去ると、自前のナビ映像が半透明の膜を張りつけていた。すでに白い船は霊柩船の後方、小さな点と輝き、そのテリトリーからさえ抜け出しつつある。
『社長とモディーは葬儀屋でやんす。オトリではないでやんす！』
『たまにはマトモなことをいうじゃないか、モディー』
唱えるモディーへスラーは小さく笑った。なら前に光速の入り口は表示される。侵入速度が明滅し、霊柩船へさらなる加速を要求した。従い目指して、スラーはスロットルを倒してゆく。その両サイドで、侵入回避可能エリア突破までのカウントダウンは高速回転し、船はインターの要求に応じて船種の申告を始めると、提示データを展開していった。前にして、殴られてもいないというのにモディーの目もまた歓喜に、

せわしない回転を始める。
『社長に褒められたでやんす。モディーは褒められたでやんす！』
瞬間、途切れるカウントダウン。
焼きついたかのごとくアクリル一面が白く弾けた。
霊柩船は『アーツェ』へ向かい、光速航行を開始する。

『しまった。せめて1袋でもエスパを持ってきておくべきだった！』
その頃、トラはひとりヒザを打っていた。だが嘆いたところでもう遅い。『バンプ』は路肩停泊も許されぬ光速航行中だ。どれほどネオンの行方に気をもんだところで、鎮めておさめるエスパを求め、引き返すことなどできはしなかった。
だからして落ち着かずトラは、捕らわれた獣のごとく何度も船内を往復している。途中、エスパのカラ袋を見つけ、わずかに残る匂いを楽しんでもみた。そのカラ袋を片手に、妄想の中でエスパを食べるフリにさえ浸ってみる。だが直後、襲い来る虚しさは並大抵のものでなく、なおさら耐え切れず投げ捨てていた。
それもこれもを紛らわせ、誰かれかまわず連絡を入れてみようと考えた時もあった

が、自身に無駄話などできはせず、たとえ挑戦してみたところで『アーツェ』到着まで続くような話題こそトラは持ち合わせていなかった。

諦め、ブロードバンド・キャストライブをつけたきりにする。そのけたたましさは束の間ながら、トラの虚しさを埋め合わせてくれたようだ。しかしながら一方で、次々と既知宇宙の一大事を並べ立てようとも、トラの思いに答えてくれる気配こそない。音は次第に耳へ入らなくなり、完全にうわの空となればもやのかかったようなトラの脳裏に一体、自分は、何をしにどこへ向かっているのだろう、という疑問さえもが浮かび上がろうとしていた。そうしてぼんやり、ネオンのことを思い出す。それはモバイロ越しの映像始まり、次々と時間をさかのぼるがまま、ギルド本部のオークション会場にまで巻き戻されていった。

『ヒト』臓器一式
性別　女
年齢　汚染状況不明
品質保証なし

おかげで一式とは思えぬ激安価格がスタートだったオークション会場は、トラの目の前に広がってゆく。その時は誰もまだ仮死ポッドにあの楽器が眠っていることなど知りはせず、おかげでたいして盛り上がることもなかったオークションは、トラのつけた破格の値で大盛況のうちに幕を閉じていた。

そうまでして買い取ったワケを思い起こしてトラは、たとたん全身のシワをぶるん、と波打たせる。埋まっていた操縦席から飛び出し身を起こした。すっかりたるんだ頬を、両の手で力の限り挟み込むが早いか、上下左右へ伸びるだけシワを伸ばし、幾度も顔を叩きつける。

これもまたイルサリ症候群への入り口か。

正気を保ち、見開く両眼。充血して赤くなったそれをこすって、航路の残りを確認した。

光速の出口は、ようやく現実的な距離をおいたその向こうにのぞき始めている。早いに越したことはない。ならばとトラは、息も荒く降船準備に取り掛かる。

『大型貨物船　エイサー号』。

積荷は微生物加工工場の作業用ゴム製着衣。
乗組員は極Ｙ地域に拠点を持つ、電離精製工場の社員。
機械任せのインターで乗組員のＩＤや積荷の確認が直接行われることはなく、だからしてそれが現在、テンたちの船が装い、提示しているデータだった。
（テンよう。アーツェへ着いたら、一回、メンテ入れてもらわなあかんで。船体が妙な音、たてよる）
その艦橋でナビとオートパイロットに船を任せたコーダが、上二本の腕を胸元で深く組み、不安定に揺れ続ける計器類を睨みつけつつ下二本の腕を振っている。傍らではテンが、床に固定されたプラットボード上部に極Ｙ種族独特のキー配列がほどこされたホロデバイスを広げ、入力に先ほどからずっと四本の腕を駆使し続けていた。
（それはアーツェであいつらを確保してからや）
『フェイオン』からの緊急離脱後、『Ｏｐ１』へ飛び、休む間もなく『アーツェ』へ向かうこととなった船の疲労具合は確かにピークだ。いつものテンならこの船を熟知するコーダの提言をなおざりにすることはなかったが、今回ばかりはそうもいかない。テンは片手間と振り返す。
（わかった。わかった。そう、いこじなフリで返さんでもええがな）

見て取りコーダが、冗談紛れと跳ね返す。そしてふと、深く組んでいた腕を緩めた。
（そやけど、そうなったら、わしらがこうして動話、使うのも、これで振り納めゆうことやな）
いつもの勢いが失せた動話に漂うのは、似合わぬやるせなさだ。ついぞテンも、プラットボードから視線を逸らしていた。
（そうや、これからは俺らも二十三種と肩並べて生きてゆくんや。もうバカにはされへん。どこでも商売して、どこにでも雇うてもらって、こんな暮らしをしとる同胞をオモテの世界へ引っ張り出してやるんや）
その振りを眺めたコーダの口から、やおらため息のようなものがもれる。その肩が落ちた。
（食うてはいけるが、なんや、せがないのう）
テンは答えない。プラットボードから引き出されてくる情報へ、あえてその目を凝らした。かと思えば、プラットボードへ身を乗り出す。瞬間、指を鳴らして大きく振りかぶった。
（きた！）
振ると同時だ。ホロデバイスを隅へと縮小す。プラットボード上に新たなホロスク

リーンを広げ、そこに『アーツェ』の小さな田舎町を立体地図として立ち上げた。そこへ、テンは手を差し入れる。まるでボールでも転がすかのように地図を左右、上下と回転させていった。させながら、地図内に記された赤いドットの位置をあらゆる角度から確認してゆく。

（こんまい、店やな。あの留守録は、ほんまにここからやったんか？）

と、両のヒザ頭へ派手に両手を叩きつけたのはコーダだ。

（なら、ハラ、決めるしかないの！）

（いまさら引けるか？）

テンが指を折り返す。

（せやの）

切なげな笑みを浮かべたコーダが、振っていた。ひとつ吐き出す息で気持ちを整え直す。その腕を大きく振りかぶった。

（おっしゃ、作戦練るならクロマとメジャー呼ぶぞ！）

つづる動話で、船内通信用のプラットボードへふたりの名前を読み込ませてゆく。

『それから……』
付け加えた。
『それから？』
シャッフルは眉根を互い違いと歪ませる。歯切れの悪い部下の目を、真正面からのぞき込んだ。
『妙な問い合わせの記録がひとつ、浮上しております』
巡航艇の中枢は外の景色すら堪能することを惜しんで、機材に埋め尽くされている。その端末に埋まり部下は、濁らせた言葉の先をシャッフルへ吐き出していった。
『ハウスモジューール勤務のラウア語店員の遺体を引き取りに、葬儀社が臨時収容船へやってきたそうです』
あまりにも目立ちすぎる制服を脱いだふたりは今、『アーツェ』上陸に備え、階級を伏せた一般公務員のいでたちを装っている。
『ラウア語？　ハブＡＩの外部出力内容に応じて、我々が再開させたあのカウンターのことか？　だいたいあれはかなり以前から凍結されれいたため、極Ｙの手配した者が店員を装っていたのではなかったのか？』
『なので、そのことを尋ねて現れる第三者の存在は奇妙だと……。可能性ですが、こ

ちらの動向を伺うべく何者が現れたのではないかと』
『ギルドの次は葬儀社か』
しばし唸り、シャッフルはアゴをなでた。青白い顔を拭い、改め部下へ問い返す。
『どこの葬儀社だと？』
『記録には、スラー葬儀社という名が残っております。偽名ではないようです。霊柩船航行専門の小会社でした。現場で確認した腕章から営業経歴も閲覧できますが、ごらんになられますか？』
『いや』
軽く手を振りシャッフルは拒否した。続けさま、最低限の措置だけを指示する。
『光速の利用記録をチェック。補足しておけ。特殊船舶なら、そう簡単に姿はくらませんハズだ。誰の依頼で動いたのかは気になるところだが、我々は実験体の確保を最優先とする』
答える間を惜しみ、部下が手配につとめていた。
『アーツェ』まで、あとわずか。
これでカタを付けると、シャッフルは自らに言い聞かせる。

そして惑星『アーツェ』の砂漠港、ドック『１１』には、ライオンが注文した船を除く全ての品々が届けられていた。ボックスは船内に持ち込めない大きさのため、三輪ジープの傍らにおかれており、緩衝チップの中からハイヒールを取り出したネオンは早々に履き替えてもいる。

「やっぱり、コレじゃなくっちゃ。昔にお別れしても、コレだけは譲れないわ」

前に後ろに自らの足元を確かめて笑顔満面、くるり、一回転してみせた。

アルトもまた新しい作業着を羽織ると、塗膜セットに、アクリルのクラック検知キットを始め、各種部品、そしてミールパック一式がボックスに収まっていることを黙々と確かめる。

「おい、こいつは中だ」

ハイヒールにはしゃぐネオンへ、ミールパックの詰まった『ユニバーサルデリカ』の箱を押し出した。

「はーい。食べた分もこの靴の分も、ちゃんと働いて返させていただきますから、ご心配なく」

抱え上げたネオンは皮肉も楽しげと、ままに船へ踵を返す。

「いい加減にしろよ。靴代くらい払ってやるっていってるだろ。ここを出る方が先じゃないのか」

その背へアルトは投げつけた。

「店であれだけ言っておいて何よいまさら。ホントは乗せたくなかったのはどっち？とにかく、ケジメはつけさせていただきますっ！」

ネオンが吐き返すこのやり取りは、アルトが２８番のミールパックをたいらげてからの定番である。だからしてそれ以上、相手にすることなく、ネオンもまたその背中を船の中へと消し去っていった。

見送ってアルトは舌打つ。だがどちらにせよメンテナンスが終わらなければ、この問答も無意味だ。とにかく宅配ボックスから取り出したクラック検知キットを、組み立てることにする。

そんな通常メンテナンスは一人ならば丸一日はかかる作業だが、ライオンが手伝いをかってでたことで夕暮れまでには仕上がる予定だ。当のライオンもまた船を所有する者なら知れた段取りと言わんばかり、すでに船の動力室から担ぎ出した足場を組み上げ始めていた。

互いはメッセージ再生が終了して以来、その内容についても、思いがけないアクシ

デントについても、なんら語り合っていない。いかんせんボイスメッセンジャーであるライオンにとって客のプライバシーへ首を突っ込むことはタブーであったし、アルトもまた突っ込んでいいようなスキを与えていなかった。だからして暗黙の了解はそこに成り立つと、互いはただ目の前の作業にのみ専念する。

「塗膜を張り直す前に、この砂塵を拭うのがひと手間のようだな」

組み上げた足場のてっぺんで、船の汚れ具合を見下ろしライオンが眉間に生えるヒゲを逆立て唸った。

「ああ。ここで張るのは初めてじゃない。段取りなら心得ている。任せろ」

片手にちょうどのハンドガンタイプだ。組み終わったクラック検知キットの動作をアルトは確かめる。

「積み込み終了っ」

その顔をライオンへ持ち上げたなら、船からネオンは姿を現していた。置いてきた箱の代わりか、胸には楽器がさげられている。

「後は、練習させてもらうわね。いつもログジャンキーが相手だから、そうじゃないお客さんを相手にするなんてなんだか緊張しちゃって」

もう定位置だ。言って三輪ジープの荷台へ腰を下ろした。

などと折れる様子のないネオンから、アルトは口を尖らせ顔をそむける。
「好きにしやがれ」
なら思う存分と、ネオンはマウスピースをくわえ込んだ。大きく肩を揺らして息を吸い込み、これみよがしと乱暴な音色を放ってみせる。すかさずキーを上から下へ弾いたなら、逃げ回る小悪党がごとく音をすばしっこくつなげて思いのたけを奏でてみせた。
耳にしたライオンが驚いたように白い牙をむき出す。だがそれも束の間だ。足場の上でリズムに合わせ、やがて体は小さく揺れだす。ＢＧＭにしてメンテナンスは始められていた。
済めば今夜にもごろ寝バー『アズウェル』でのライブが、誰もを待っている。

つま先立ちで背伸びする。ミノムシドアの表面に行き先を記録させたメモを貼り付け、デミはエアソールシューズのかかとを地に着けた。荒いドットを瞬かせメモは、そんなデミの前でサスあての短いメッセージをスクロールさせている。
『仕方ないよね。間に合えばいいけど』

つまりサスはまだ店に戻っていない。そして何も聞かされていないデミは、取引のためサスは店を離れているのだと信じていた。

『大丈夫、間に合わないなら、また、ここへ来て演奏する。それより学校も、遅れた』

残念そうなその顔へ、首からストラップだけをかけたネオンは口を開く。

『学校なら大丈夫だよ。フェイオンでのデータは頭の中だし。戻ったらすぐ提出できるよう、ジャンク屋の船の中でまとめておいたから』

振り返って笑うデミの様子は、あながちウソとも取れない自信に満ちている。

『たまげた逸材だな』

ライオンがあきれたように言ってみせた。

『あんたが仮死ポッドに入っている間、おかげでこっちはどれだけ振り回されたか知れないぜ』

アルトもすかさず口を挟む。

暮れかけた『アーツェ』の空は、真っ赤だったその色を今、溶けるようなクリーム色へ変化しさせつつある。そんな夜空の片隅には、くぐり抜け、向こう側へ抜け出せそうな衛星の蒼い影が二つ、ぼんやり穴をあけていた。休むことなく循環して降り積もる砂塵のせいだ。けぶる大気のせいでそれ以外は判然とせず、まるで分厚い絵の具

に塗り固められたような閉塞感が、砂漠の星の片隅のこの小さな町を覆い尽くそうとしている。

『しかしその店の予約、いつもの倍以上だと聞いたが』

苦笑いに黒光りする鼻先をひくつかせ、ライオンが確かめ問うた。

『だって伝説では聞いていても、誰もホンモノの音なんて聞いたことないんだよ。当然だね』

ネオンは肩をすくめ、デミが鼻溜を揺らして教える。さもありなんと、ライオンが深く腕を組むのは、メンテナンスをこなしながら練習するネオンの音を聞いたせいだ。

『確かに、あれは不思議な音だった。いや、聞いたと言うよりも触れたような体験だった。言葉がないので意味は分からないが、それでも確かに伝わるものはある。なるほど、言語と種族を超越して一世を風靡したのも頷けるというものだ』

『フェイオン』の下層で同じ事を感じたのだろう。満足げに鼻溜を膨らませて、デミもまたうなずきかえしている。勢いを借りて誰もの先頭を切り、そのきびすを返した。

『じゃ、そんなショーの待ってるお店までは、ぼくが案内するよ。ついて来て！』

路肩に止められていたビオモービルの後部座席へ、ネオンを乗せる。ビオモービル

はデミの運転で、公道を耕すように砂塵を巻き上げ走り出した。その後を、アルトとライオンを乗せた三輪ジープが追いかける。

そうして連なり走る道すがらデミがネオンへ確認したのは、これからの段取りだ。今夜のステージが二部構成だということであり、前半はネオンのソロが、後半はデミのお膳立てした地元『リピトール楽団』とのセッションが用意されている、というくだりだった。

『楽団は、もうお店に入ってると思うよ。打ち合わせは、着いたらすぐ始めるね。もちろん通訳は、ぼくがするからおねえちゃんは安心して』

そもそも他者と演奏することもまた、ネオンにとってはこれが初めとなる。

『わかった』

『お金は、お店の営業が終わった後、売り上げの十三パーセントがもらえるってことになってるよ。物価の違いがあるから、すこし少なく感じるかもしれないけれど、お店はこれ以上はムリだって。ケチだよね。こんなすごいショーなのに』

不服そうにデミの鼻溜が膨らんだ。その目でちらり、サイドミラーをのぞきこむ。後方から追いかけてくるアルトの三輪ジープを確認した。

『だからってわけじゃないけど』

視線を戻し、そっとつけ加えたのは、こんな言葉だ。
『お店のひとは、よければ明日もって……』
肩越し、ネオンへと振り返った。
ネオンはそんなデミへ、かぶりを振って返す。
分かっていただけに、デミの鼻溜はきゅっと縮まっていた。
『そうだよね。だっておねえちゃん本当は、おいちゃんが来る前に、ここを離れたいんだよね』
まっすぐとはいえ時折、対向車も現れる目抜き通りだ。前へ向きなおった。落胆ぶりは手に取るようで、ネオンの心に刺さる。
『色々、アリガト。ごめんね』
せめてもの償いだと、言っていた。
『そんなの、いいよ。だっておねえちゃんに見つけてもらえなかったら、ぼくの方こそどうなっていたか分からないもん。ぼくこそありがとう。わがまま言ってゴメンね、だね。そうだ、さよならする前にジャンク屋にもちゃんとお礼を言っておかなきゃ。でもね、でもなんだよ。おいちゃんは悪いひとじゃないよ。だって、ぼくにとっても優しくしてくれるもん』

最後、付け加えて鼻溜を歪める。膨らませて一息ついたデミの問いかけは、だからして意を決したようにネオンの耳へ届いていた。
『おいちゃんのこと、キライ？』
気づけばクリーム色だった空は白く腫れ上がり、すっかり一面を覆う夜へ変えている。降り注ぐ砂塵はそんな空に反射して、夜道は粉雪が舞うがごとく白くけぶっていた。
『だから急いでここを出て行きたいの？』
などとストレートな質問は、包まれたビオモービルの中、ネオンからクスリ、笑いを引き出させる。
『好きか嫌い、か……』
考えたこともないようなそれは二者択一で、吟味すればネオンの目は、大げさなまでに周囲をぐるり見回していた。後部座席へ背を倒してゆく。深く埋もれてネオンは一息ついた。その目が、ルームミラーに映ったデミの心配げな目と合う。
『一緒に仕事をしていた。けどデミが女の子になる、決めたように、サスの店を継ぐ、決めたように、わたしにも考えがある。けれどトラはそれを認めてくれない。だからケンカするの』

造語に細心の注意を払い、言った。
『苦手だけど、好きや嫌いじゃない。これからどうするのか。わたしの考え、なの。だからトラがいいひとだとしても、思いなおせない』
ルームミラー越し、デミの目は絶えず話すネオンを見つめている。かと思えば静かにその鼻溜を揺らした。
『あのね、ぼくが、女の子になっていいのかどうか迷った時、おじいちゃんに相談したことがあったんだ』
話が突飛であったことはいうまでもないだろう。ネオンは数度、目を瞬かせる。その意味が掴みきれないからこそ、よく聞き取ろうと座席から背を浮かせていた。ならデミはこう続ける。
『だって、ぼくはおじいちゃんの店を継ぎたかったし、おじいちゃんは男の子を選んだんだもん。それでいいのかなって思ったんだ。そしたらね、おじいちゃんは、ぼくにこう言ってくれたんだ。それはぼくが決めることだって。だってそれは、ぼくの生き方だから。えっと、ヒトなら「人生」って言うんだっけ？　おじいちゃんは少し寂しそうだったけど、ぼくの決めた通りにやってみなさいって言ってくれたんだ。きっとおいちゃんとおねぇちゃんも、そういうことなんだよね。良いとか悪いとかじゃな

くて、好きとか嫌いとかじゃなくて、そうありたい、ってことなんだよね』
生き方、という言葉は考えてもみず、突きつけられてネオンはしばし言葉を失う。いや、ただその言葉に妙な力強さを覚えて内に、たくわえた。確かめるようにそれを『ヒト』語で、なぞりなおす。
「……生き方、か」
思い起こせば仮死ポッドが見つけ出されたことも、蘇生されたことも、過去を覚えていないことも、負わされた借金も、何一つネオンが主導権を握ることなく押し付けられたものだった。そうして過ごした時間は長く、自らが選ぶなどとすっかり忘れたまま、毎日は積み上げられてきている。果てにこれが初めて自ら選んだ道だというのなら、その新鮮な感触をネオンはそっと手繰り寄せていった。
『生きてる』
つづる造語。
『なら、仕方ないよね』
あっけらかんと飲み込んで、デミも鼻溜を振る。
『今日は、そのための演奏』
おそらく生きるためではなく、今日、初めて、生きている今を奏でるのだ。感じて

ネオンもただ返した。
『楽しみだな』
知ってか知らずか、デミが短く答えている。
それきりふたりは押し黙った。ほどなくその視界へ『アズウェル』のホロ看板は、温かい色味で浮かび上がってくる。デミはビオモービルのキャタピラを減速させ、路肩へ寄せた車体のエンジンを切った。おさまった震動に、ネオンの頬へ忘れていた緊張感は張りついてゆく。
今日は特別だ。
強く意識していた。
店先に止まった駆動音を聞きつけ、ボーイが店内からあらわれる。その顔は、歓迎の笑みで満ちていた。向かってデミがビオモービルから飛び降り、意を決したようにネオンもまた抜け出してゆく。
白く遮のかかった『アズウェル』のホロ看板を見上げる両眼に込めた力は、並大抵のものではない。
『盛大に、始めるわよ』
声は不敵と、その唇からこぼれ落ちる。

そしてその頃、『貨物船　エイサー号』は町外れの砂漠港で、着陸態勢に入ろうとしていた。一方で町を挟んだ反対側、砂塵に埋もれた連邦軍跡地の滑走路では、停泊した巡航艇の尻から絶縁スーツに身を包んだ分隊たちの足跡は、砂漠の中へ伸びていた。トラの乗る『バンプ』は『アーツェ』を前に光速を抜け出し、まだその道中にあるスラーとモディーは、船内で相変わらずのどつき漫才を繰り返し続けていた。

只中で町は静まり返ると、聞いたことのない音色に胸、踊らせた影を数多、『アズウェル』へ向かわせている。

幕開けまであとわずか。

『アーツェ』の夜の白さは今まさに、その極みにまで達しようとしていた。

そしてサスは、砂塵に埋もれた通信室の一角、降り積もる砂塵をかき分け、露出した床の上にあぐらをかくと鼻溜を揺らす。

『ここからは、スピードアップじゃな』

ながらく封鎖された基地跡に電力は供給されていなかった。だからして、バックアップ機材に加えてバッテリーをここまで背負うと、夜を徹して作業に必要な通信室内

の機材部位特定と、持ち込みのバッテリーでどうすれば電力がまかなえるのか、試行錯誤の果てに接続をすませている。今や傍らには、商品として店に保管されていたポータブルホロスクリーンが広がり、これまた同じく商品のメインコンピュータが二台、そのバックアップが一台、物理キーボードもまたひとつ、通信室機材へつなげられていた。おかげでサスの周囲には、ミニチュア版の通信室が出来上がっている。

駆使して潜り込むのは、スラーが向かっただろう臨時収容船の中枢だ。何しろアルトへ臭気マーカーを吹きかけた相手が『ラウア』語店員であり、そこによみとおり連邦と極Yが絡んでいたなら、探しに現れた葬儀屋の素性はチェックを受けぬはずがなかった。見極めるのは無論、チェックした者の正体である。それこそがアルトを追い回す輩に違いなく、違ったとして、少なくとも辿り着くための手がかりになるはずだった。

だというのに今さら手を引け、とアルトは怒鳴り込んできている。何がどうしたというのか、失っていた記憶を取り戻したからこその提言は、潜む危機を匂わせて止まなかった。そしてそう訴える本人こそ、のんきとここに留まっているようには思えず、一度、飛び立てば二度とここへは、いや、ジャンク屋という仕事へすら戻ってこないだろうこともまた感じ取らずにはおれなかった。

もちろんサスに引き止めるつもりはない。思い出したというならその先こそ、アルトが進む道だと考えていた。ただそれまでに借りはきっちり払い戻したい。サスは思う。手に入れた情報を渡して快く見送ってやりたい。それだけを考えていた。

ままにサスは、組み合わせた両手を胸の前で丹念にすり合わせる。

『とはいっても、せいぜい不正アクセスがバレるまでの間じゃかからの。そう時間がかかるもんでもあるまいて』

大きく膨らませた鼻溜を振ってサスは、周囲の機材のみならず自らの心も整えた。

すり合わせていた手を離す。

ヒザ元の物理キーボードへ添えた。

丸めた背中で、真向かいに立ち上がるポータブルホロスクリーンをのぞきこむ。

傍らの砂山で、ハンドライトの光が揺れていた。

満ちる静けさが、これから行われる全てのいかがわしさを倍増させる。

とたん勢いよくキーボードを叩きつけるサスの指。

風化しているだけで、壊れてしまったわけでない。まずは軍事基地の通信回線復旧に取り掛かった。伴い機材が、かけられた低い電圧に浅く脈打ち、狭いポータブルホロスクリーンへ近隣基地とのネットワークを広げてゆく。ただしそのどれもは、ここ

が閉鎖されているせいで侵入制限という名のセキュリティーにより取り囲まれた袋小路を描いてみせた。うっかり踏み破って不審者丸出しだけは、いただけない。捨て置きサスは、延長線上に開かれてゆく船舶へのラインへ目を移した。『フェイオン』周辺で事後処理に当たっている船舶を探し、潜り込みやすい船を渡り歩く。

やがて辿り着いたのは、粘菌ネット保護を目的に巡航を続ける巡回船だ。

そこに残された船舶間の通信記録へ、手をつけた。

辿って、似たような船舶の間を行き来する。

果てに経て粘菌ネットから他船の出入りをサポートする監視船内へ、潜り込んだ。その監視船が最もやり取りを繰り返していた船、遺体運搬船まで飛ぶ。ありがたいことに遺体運搬船のコンピュータは今もなお、がっちりと臨時収容船の管制とつながってくれていた。いや、船は今まさにその格納庫へ潜り込もうとしている最中であることを知る。

思わずサスの頬に笑みは浮かび上がっていた。

コトに及ぶその前にサスは手早く左右へ、もう一枚ずつ、サブスクリーンを立ち上げる。カモフラージュとして、持ち込んだバックアップ機材をかませ、この基地のアクセスコードを使い、臨時収容船への侵入を試みた。

コードが拒否される気配はない。
ただし、それが閉鎖された基地のものであると気付かれるまでは、いかほどか。危ぶみながら、スラー葬儀社に関する記録検索に取り掛かった。名前は予想通り、管制記録のみならず入鑑リストの中からも見つけ出される。入艦リストに彼らの行動記録として、『ラウア』語店員の検索結果も付録されていた。
瞬間止まる、サスの指。
おかげでそのファイルは予想通り、外部からのチェックを受けている。
ビンゴ、だ。
『すまんの。スラー』
詫びてサスは、一気にチェック先へ跳んだ。
落ちて始めて、ガラリと様子が変わったことに戸惑う。なぜならそれまで幾つも通り抜けてきたシステムとは全く毛色の違う構造がそこに広がっていた。ひときわ聞いたこともない名称が、見回すサスの目に飛び込んでくる。
ラボ『Ｆ７』。
そばには極Ｙの踊り子『トニック』の名がついたデータ群が、把握にかかればオーバーフローしかねない巨大さで渦を巻いていた。さらには症候群を世に知らしめた医

師『イルサリ』の名がつけられた同等のソフトウエアも確認できる。そこにはそのソフトウェアが発信したらしい三つのデータが、ぶら下がっていた。数多くの端末が、それらへ接続されている。

と、サスの目がさらのように開いた。

しばし瞬きを繰り返し、穴が開くほどそれらを見つめる。なぜなら発信データのうち二つには、明らかに覚えのあるアドレスが刻まれていた。そう、暗号化されていないそれは、アルトの地球宅と、『Ｏｐ-１』に建つトラの事務所への送信アドレスだ。

気づけばそこへ手は伸びる。

確かめんとして介入していた。

急転直下、ウィルスはその時、送りこまれる。

バックアップ機材がサスの傍らで、吐き出す熱量を一気にアップさせていた。用意していたアンチウィルスをありったけ放ち、サスは迎え撃つ。だが状況は拮抗するどころか圧倒的劣勢だ。潰されるのも時間の問題と底を割る。なら駆るのはキーボードだった。サスはよりいっそう激しく弾く。

立ち上がる三面のホロスクリーンで、流れる情報が量を増した。やがて『イルサリ』を取り囲み、暗号化されて並ぶアクセスラインの存在を明らかとする。その中に『ア

ルト』の表記を見つけ、含む全てが『イルサリプロジェクト』と名づけられたネットワークであることを理解した。スラー葬儀社ファイルはそれらネットワークを経由すると、『イルサリ』を囲むアクセスラインを経てまた別の場所へ転送されている。

そこもまた船だ。

そこに、探し求める相手はいる。

確信したところで、潜りこんだ後、探るだけの時間はもうなかった。ならせめて把握しておきたいのは、船の位置だ。一か八かだった。サスは船のナビへ、任意のプログラムを放り込む。ナビが位置確認を行えば、衛星を間借りして動作したプログラムの送る船の座標を確かめるつもりで身構える。いや、軍事船の使用する衛星なら、想定通りとプログラムが動作する保証はなかったが、今、吟味している暇こそなかった。

が位置確認を行う船に、衛星の中でプログラムは素直と動作する。

飛ばされてきた信号を拾い上げたなら、すぐさま船の座標は特定されていた。

『アーツェ、ここか?!』

最後にして、ホロスクリーンの表示が落ちる。周囲でバックアップ機材が次から次へダウンしていった。唸っていた放熱ファンの音が止めば静かに、ハンドライトの明かりだけが淡く辺りを照らし出す。

（……なんや、コレ）

下二本の腕と身の丈ほどのスパークショットを場違いなほど分厚い外套の下に隠したテンは、目を丸くして動話をつづる。同様のいでたちで身を包んだ極Y船賊たちは今、なす術もなくガラクタぶら下がる一枚のドア前で、頭を寄せ合っていた。凝視しているのは、そこに貼り付けられたホログラムだ。それは否が応でも彼らの目を引くと、文字らしき映像を懸命にスクロールさせていた。

段取り通り、先に店の裏口から突入したクロマたちはすでに店がもぬけのカラであることをテンたちへ、伝えている。ここで新たな手がかりを掴めなければ、連邦との取引は半ばなくなったも同然の状況に、テンはただただ焦っていた。

（造語ですよ、テン。文字の羅列なら何かのメッセージかもしれません）

痛いほど察してメジャーが、ホログラムから顔を上げる。

（造語やと？　なんて書いてあるねん。誰か読めるヤツはおらんのか）

見て取りテンは周囲へ動話を放った。だがその大役をかって出る者はいない。当然といえば当然だ。もとより話せない言語を、そうやすやすと読み下せる輩がいるワケ

もなかった。しびれを切らせてテンは、そんな船賊たちの頭を藪から棒に叩きつける。
（もう、ええわ！）
叩いたついでに振り回し、ドアを押し開けた。家捜し中だったクロマたちが勢いに慌てふためき、テンへスパークショットを振り上げる。さされても怯む道理はない。仁王立ちで、テンは踊った。
（ラチがあかん。今すぐ、連邦へ連絡取れ。動画送って、あの映像を訳してもらえ！）

降船にあたって、さしたる指示は必要なかった。絶縁スーツに身を固めた分隊は激しく流れる間欠河川を片側に、着陸時、巡航艇が砂塵をかき分けるようにして作った滑走路のワダチの中、すでに待機している。その背後には白くけぶる『アーツェ』の夜が広がり、まさに亡霊と化した基地跡をシルエットと浮かび上がらせていた。
船内には緊急事態に備え、パイロットと通信担当のみが残る段取りだ。部下はそんな通信担当と、ちょうど無線回線の最終確認を済ませたところらしい。口と鼻だけをコンパクトに覆った防塵マスクの機密具合を確かめるシャッフルへ、確認澄みの無線を差し出していた。受け取り本体を耳の後ろへ掛けたシャッフルは、そこからT字に

伸びるコードの片側先端をこめかみ付近に貼りつける。ぶら下がるもう一方のマイクの高さを調節した。

『分隊のワイヤレスとも、つながっています』

同様に装着する部下が告げる。

応えて返すかわりだ。絶縁コートへ袖を通しシャフルは、船外へ足を向けた。

ズボンのポケットから取り出した絶縁手袋をはめつつ部下もまた、その背を追う。続けさま、腰元のソケットからスタンガンを引き抜き、軽く引き金を絞った。ハンドガンに似た銃身の先で、二つに別れた電極の間から淡いグリーンの火花は散って消え去る。

『携行は許可したが、なるべくなら出番がないこと願いたいものだな』

音だけで察したシャッフルは、言っていた。

『万が一は、いつどきでも想定しておくべきかと思いまして』

慎重な手つきで部下は、スタンガンをソケットへさし戻している。

『その万が一が起こってもらっては困る、と言うのが、わたしの本音というところだ』

とたんハレーションを起こしたような夜空と、降り注ぎ舞い散る砂塵の白がシャッフルの眼を刺した。後部ハッチを潜り抜けたところでシャッフルは、思わず手をかざ

す。しばし両目をきつく細め、掲げていた手を払いのけると辺りを見回していった。よくもこんな辺境の地にまでやってきたものだと、『アーツェ』を前に達成感ともため息とも取れぬ息を吐きだす。

背面の風景を前面に投影することで、あたかもそこに物体がないような視覚効果を与えるミラー効果を備えた絶縁スーツの分隊員たちはすでに、そんな風景と一体化していた。わずかゆれ動く景色だけでシャッフルはどうにかその存在を確認すると、幾分慣れてきた目を開いてゆく。

おもむろに手を振り上げた。

極Yが伝えてよこした店舗を目指し、町へ足を踏み出す。

と、押し止めてその時、こめかみは震えていた。

巡航艇からの連絡だ。

全員の頭蓋内へ響いたとあって、動き始めたばかりの一団の動きは、そこでピタリ、止まっていた。すかさず部下が集団の中央へ、進み出る。

『極Yからの通信、プラットボードで流します』

伝えると共に、プラットボードを開いてみせた。なら送られてきた動話を元に、誰もの前でヒモ人形は踊り出す。ただちに動話はプラットボードによって翻訳されてゆ

き、人形の右肩にはファイルが添付されているらしい、部下がすかさずその解凍にとりかかった。
『思ったより早いようですね。目的の店舗確認を終了。ですが対象は不在、ですか』
だがそっちのけでシャッフルは、解凍の終わった添付ファイルを睨みつける。それはかなり短い動画で、すぐにもその説明を部下へ求めてその顔を上げた。
『これはどういう意味だ』
いや、なにも動画の中を流れる造語が読めなかったせいではない。一目瞭然だからこそ、シャッフルは問わずにおれなかったのである。
『はい。極Yはその際、店舗で見つけた造語の訳を頼みたいと、この映像を添付してきておるようです』
聞かされシャッフルは、愕然としていた。その手が、まるで目を覚まさせるように青白い額へあてがわれ、いつものように防塵マスクごとひとなでする。
『まさかこれも読めんのか、奴らは』
追い込んだのが自分たちだったのなら、それはあまりにも皮肉な話だった。

おじいちゃんへ

先にみんなと『アズウェル』へいってるよ
ライブは閉店までやっています
必ず来てね

見て取った分隊員が、電子地図を取り出していた。宙に灯りを浮かべ、地図はすぐにも砂塵の中に展開される。
『の、ようです。しかし、この、ライブというのは……』
確かめた部下が告げ、言葉を濁してシャッフルへ視線を投げた。しかしシャッフルの答えを遮りまたもや、コクピットから連絡は流れ込んでくる。
『緊急連絡』
その口調は、極Ｙの通信を知らせた時とは明らかに異っていた。聞き分けシャッフルは、動画から視線を逸らす。低く問い返した。
『どうした？』
『Ｆ７への不正アクセスが発覚。阻止すべく、ウィルスが展開された模様です』
『何だと？』
『今のところ、改竄やワームの痕跡はありませんが、一部情報の漏洩は必至かと思わ

れます』
『それで相手は？』
『それが……』
コクピットからの声は、そこで詰まる。
見計らったかのようにシャッフルの前へ、ひとところをマークした電子地図は差し出されていた。
『アズウェルの場所が分かりました。市街中央の飲食店のようであります』
見て取りシャッフルは先に向かえ、と立てた人差し指で進行方向を示し、指示を与える。
巡航艇がかき分けて出来たハズのわだちは、すでに降り積もる砂塵よってうっすら埋められようとしていた。動き出した分隊は、そこへ判をついたかのような足跡を街へ向かい連ね始める。
と、途切れていたコクピットからの声は、再びシャッフルのこめかみを振るわせていた。
『それが、不正アクセスを仕掛けてきた端末は、ここ……この閉鎖基地の通信室となっておりまして』

シャッフルと部下は思わず顔を見合わせる。
『時間は？』
絡めた視線を引き剥がし、シャッフルはすかさず問うていた。
『六三八セコンド前』
部下が、白く霞む基地跡へ体を捻る。
『まさか』
『対象でない、とはいえん』
耳にしたシャッフルの声は異様なほど低い。いや、否定してしまえばここまでやってきたことが、無駄足だと言うことになった。刹那、シャッフルは部下へ指示を繰り出す。
『今の電子地図を添付。極Ｙに依頼の訳をと共に返信してやれ』
矢継ぎばや、マイクへ呼びかけた。
『分隊長！　三体でいい、こちらへ兵を戻してくれ』
呼びかけながらもう一度、プラットボードへ通信内容を入力し始めた部下へ手を振る。
『お前とわたしは戻ってきた兵と共に基地跡内部を確認する。この砂塵だ。スタンガ

ンをもう一度、点検しておけ』
作業中の視線を注意をひきつけ、つけ加えた。
その頭蓋内で、『了解』と返す分隊長の声が響いている。
『シャッフル中尉』
『何だ？』
分隊長に呼びかけられてシャッフルは答えていた。
『確認しておきたいことがある。極Y、もしくは対象と接触した場合の指揮権は？』
部下は早々にも極Yへの返信を終えたらしい。プラットボードをたたみ、絶縁コートの奥からスタンガンを引き抜いている。砂塵の中、引き金へ指をかければ砂塵のせいか、飛び散るグリーンの火花はやはり漏電でもしているかのに危なげだった。眺めながらシャッフルはマイクへ言い放つ。
『我々が現地へ到着するまでは分隊長に任せる。ただ連絡だけは怠るな。回線は開いたままにしておけ』
『了解した』
そうしてシャッフルは視線を持ち上げていた。砂塵の上に、はっきりこちらへ戻ってくる靴後を見つける。最後にもうひと声と、マイクへ呼びかけた。

『コクピット、聞いてるか？』
『もちろん、中尉』
『Ｆ７に、ハブＡＩの監視強化を伝えろ。今のアクシデントで動き出すやもしれん。自閉されたままでは使い物にならんからな。動き出したなら、事態を隠ぺいしていたあのデフォルト処理を行えと伝えておけ。実験体を連れ帰れば、ハブＡＩは必ず必要となる。使えるモノに戻しておけと伝言を頼む』
『了解しました』
言い切ると同時に、歩み寄っていた足跡はシャッフルの傍らで立ち止まった。ミラー効果を切った三体の兵が、そこに姿を現す。
『我々が同行します』
一体はすでに、基地内部の電子地図を検索し終えていた。
『頼んだ』
答えればスタンガンを差し戻した部下も歩み寄ってくる。
『準備、整いました』
見回しシャッフルはうなずき返した。町へ向かう分隊へ背を向け踵を返す。立てた指で天をさし、円を描いて振った。

『行くぞ』
視界前方で基地が、砂塵に巻かれて白くかすむとコマ落とされたかのように揺れ動いている。目指し進めるシャッフルの足へ、力なく乾いた大地は絡みついていた。

店舗中央、据えられた半円卓へクロマは駆け上がる。
（アニキ、造語の訳がきたで！）
高く振り上げた腕でテンへ知らせていた。
ミノムシドアの前、苛立っていたテンの視線はたちまちクロマへ飛び、前へ、半円卓を回り込んだ通信係がプラットボードを抱え、駆け込んで来る。肩に添付ファイルを張り付けたトニックのホログラムはそこで優雅と踊り、見て取ったテンの眉間は一瞬にして開いた。顔を上げるなり周囲へ鋭く腕を振り下ろす。
（撤収や！　奴らの移動先が分かった。追跡する！）
（アズウェルの位置を、全員の電子地図へ転送や）
同時に下二本の手で通信係へ、綴って指示した。入れ違えで上二本の腕を駆使し、周囲へとテンは示す。

（全員、手元の電子地図端末確認せー！　確保、対象はそこや！　今から乗り込む！）
遅れまじと通信係が地図を転送していた。テンの指示を受けた船賊たちもまた、先を争うように電子地図を開いてゆく。傍らから、メジャーの腕はテンへ突き出された。
（テン、ここは飲食店ですよ。今行くと、客がいるんじゃないですか？）
やがて転送された地図を確認する頭が方々で、揺れ動く。見届けテンは静かに、しかしながら力強くメジャーへ上二本の腕で振り返した。
（フェイオンほどやないやろ。今度こそ囲む）
（連邦に、内容は確認した、今から向かうゆうて伝えろ。それから確保したときの引渡し方法も教えとけ、いうとけ）
下二本を通信係へあてがった。
（了解っす）
読みとった通信係の顔に満面の笑みは浮かび、一歩さがってプラットボードへ動話を読み込ませ始める。背にしてテンは真逆と前へ進み出た。呼びかけて大きく、その両腕を広げる。
（ええか、お前らアホやからな、同じ段取りで行くぞ！）
勢いに外套は翻り、位置把握につとめていた船賊たちが弾かれ、そんなテンを見上

げる。

（現場は今度も店舗や。クロマのチームは裏口から先に突入。こっちは表から客を装って入店する！　ただし、時間帯からして客がわんさとおる可能性が高い。相手の顔は忘れてへんやろうな。今回はマーキングはされてへんから見失いやすいぞ。忘れた言うヤツは現地につくまで、もう一回、頭に叩き込んどけ）

ならこれからの大仕事を前に、どの顔もひとつ残らず引き締まった。見回しテンは、ここぞと鼓舞して腕を振る。

（これが最後や、気合入れて行け！）

動話はそのとき舞踏にも武道にも通じると、翻る外套の動きとあいまって見る者を圧倒した。おかげで最後、その腕が空を切ってから船賊たちが答えるまで、しばらくの間さえ空く。やがて了解の意を伝え、スパークショットは振り上げられた。見渡しテンは、最後にその視線をクロマへ向ける。アゴを引いて、小さくうなずいてみせた。ならクロマもまた、それに応えて身を翻す。自らのチームを呼び寄せ、裏口から飛び出していった。

店内が、やおら閑散とする。

乱さぬメジャーのやんわりとした動話は、そこに揺れた。

（なら、わたしたちも行きましょう。テン）
（よっしゃ……）
テンは乱れた外套の前を整えなおす。何事もなかったかのように、その手でミノムシドアを押し開けた。

『なんだと？』
一方、降船準備の整ったトラは光速出口を前に、唖然としていた。何しろ砂漠港の貸しドックはどこも満杯だ。
『わしにどこへ降りろと……』
さすがに取る物もとりあえず『Ｏｐ・１』を飛び出してきただけはある。慌てて近場の検索に取り掛かるが、それこそが田舎町という場所柄か。町に隣接する港は砂漠港以外に存在せず、あるとするなら時差が生ずるほども離れた谷あいの、外資系フルオート工場が立ち並ぶ一角、工場専用のドックのみだった。たとえ『アーツェ』にたどり着いたとしても、それでは意味がない。
おたおたしているうちに、オートパイロットは光速を降りる準備を整え、侵入回避

可能エリア突破までのカウントダウンをコクピットのアクリル下部へ高速スクロールさせ始める。インターが要求する船種の申告に応じて船のメインコンピュータがデータを展開し、そうして船は出口への侵入回避可能エリアを突破した。利用光速料金の精算明細がアクリルへ表示され、瞬間、視界は白く弾ける。広がった光がすぐにも点へ収縮すれば、アクリル一面に乾いた惑星『アーツェ』は姿を現した。

もちろん、このまま砂塵の中へ不時着するわけにはゆかない。ドック探しを諦めたトラは、潔くオートパイロットのスイッチを切る。

『軍基地跡の滑走路を利用するしかあるまい』

しかめ面が、その顔面へさらに深く複雑なシワを刻み込ませた。

砂塵を含んだ大気に、早くもアクリルは摩擦熱で赤く染まっている。

睨みつけてトラは、間近と迫った緊急着陸に身構えた。

『駄目じゃの、こりゃ。にっちもさっちも使えんわい』

砂塵の山に立てたハンドライトも、燃料切れが間近だ。不規則に点滅したかと思えばぼんやり灯るを繰り返しては、額の汗を拭うサスを不安定に照らし出す。

復旧に取りかかってはみたものの、『Ｆ７』へ侵入するなり攻撃を受けた機器は全て、ダウンしたきりだった。しかしながらあの座標に間違いがなければ、スラーのデータをチェックした相手は今、信じがたいことにこの地を訪れているという。その理由こそアルトを追いかけてのことだとすれば、閉鎖されているハズの基地から行われた不正アクセスを確かめに、ここへ乗り込んでくるだろうことは時間の問題だと思えてならなかった。

『今度は椅子も持ち込まんといかんの』

それ以上を諦めサスは、額を拭った手で床を押しやる。よっこらせ、と言わんばかり立ち上がった。長らく同じ姿勢を取り続けたせいだ。疼く腰をなだめすかし、機材を吐き出し頼りなく潰れたバックパックを手に取る。中から携帯電話を取り出した。

収穫として満足のゆく内容ではないうえ、面と向かって伝えておきたい気持ちはあったが、こればかりは相手の動きが予想以上に早かったと割り切るしかなさそうだ。アルトの船へリコールする。携帯電話を耳へあてがい、呼び出し音の切れる瞬間を心待ちにした。だが当のアルトが通信に出る様子こそない。

ちらり、サスは時計へ視線を落とす。

時刻はすでに夕方を示していた。

『演奏へ向かいおったか？』
すでに『アーツェ』を発っているとするなら船にいるハズなのだから、この時刻に向かう場所といえばデミに聞いたそこしか思いつかない。疑いつつも、くどいほど粘って待った。
と、聞こえてきたのは微かな物音だ。しかも捉えたのは、携帯電話を押し当てている耳とは反対側の耳である。反響に反響を重ねる音はすぐにも記憶の中、砂を噛んで動きにくくなったこの建物のドアだ、とサスへ閃かせていた。携帯電話を握り締めたままだ。サスは表へ振り返る。

言い表すにけたたましい、という言葉は適切でないだろう。そのとき『アズウェル』は、至極冷静な活気に包み込まれていた。
体に付着した砂塵を吹き飛ばすべくエアシャワーブースを抜け出しネオンは、抱えた稀なるイベントの準備に奔走する店内を見回し、そう思う。
フロア壁際に並ぶ淡いハトロン紙のような壁で仕切られた個室のほとんどは、聞いていたとおりエメラルドグリーンの文字映像を浮かべ、予約済であることを知らせて

いた。だからしてそれだけでは足りぬと、間仕切りを取り払った浮島のような個室もまたフロア中央に整然と、セッティングされつつある。ならそれは飾り付けの花だろう。傍らで見知らぬ『デフ6』が、小さなアレンジメントや身の丈程もある観葉植物の仕込みにかか切りとなっていた。きっと花の仕入先はポップの店で間違いない。眺めてネオンは、記念に手渡されたアルルカマズを思い出す。

と、店内の明かりが急に落ちた。驚き目をしばたたかせたのも束の間のこと。やがてゆっくりとそれは息を吹き返してゆく。見失った個室がぼんやりと、闇の中へ浮き上がっていた。伴い、物という物から怪しげな影は伸び、個室内、互いの顔が見える程度に灯される。

そのころにはボーイたちも個室の追加を終えてその仕上がりを確かめ、様々な角度からチェックを始めていた。出来上がったアレンジメントを携え『デフ6』も、フロアの中を飛び回りだす。花は飾り付けられた場所で妖しげな色香を放ち、追加された個室へもまたひとつ、ひとつと、エメラルドグリーンの文字を灯してゆく。

だからして遅れを取らぬよう、厨房もその動きを激しくしたようだ。見とれていたネオンの耳へ、ぶつかる食器の音がけたたましく響き、すかさず威勢のいい現地語も飛ぶ。

そんな厨房ののぞき窓がついたドアから、表まで出迎えてくれたボーイが姿を現していた。抱えていたメニュー端末を清算カウンターへストックすると、涼しい面持ちで注文端末のデータチェックを始める。

「これはまた、豪勢なところへ招待されたものだな」

ライオンだ。最後にエアシャワーブースを抜け出して早々、この風景に口を開いていた。

ちなみにアルトとライオンにサスは、デミのはからいで今回、特別招待客扱いとなっている。

『何？』

『ヒト』語だったため聞き取れなかったらしい。先頭を切って入店していたデミが、ライオンへ振り返った。その顔へ、ライオンは造語を使い言いなおす。

『立派な店なので驚いた』

笑い、白い牙を剥き出した。

『当然だよ。だって、アズウェルは前に八つ星レストランに選ばれたことだってあったんだよ。田舎だけれど、町の自慢の場所なんだ』

『それはおみそれした』

デミはそれこそ鼻高々と鼻溜を膨らませ、敬意を表してライオンは頭を下げる。照れたように体を揺すったデミは、その顔をネオンへ上げた。
『おねえちゃん、どう？　ぼくたちが来たお昼間とは違うでしょ？』
釘付けとなったままだ。ネオンは返す。
『すごい』
我を取り戻してデミへ、その視線を落とした。
『違う場所みたい』
『データベースで調べたら、昔のフロアはこんな感じだった、って見つけたんだ。こういうのライブハウス、って言うんだって！　で、おねぇちゃんの立つ舞台は、ここだよ』
教えてデミは足元を指差す。店内前方、そこはエアシャワーブースと厨房入り口の中間地点だった。
『向こうから照明が当たるよう、取りつけたからね。それから、えっと、招待席はどこだっけ？』
立ち位置周辺を確認してネオンはうなずき返し、セッティングの終わったフロアをデミは見回した。ならその様子に気づいたらしい。ボーイがチェック中の注文端末を

置いて、現地語で声をかけてくれる。おっつけ指で、向かって左壁面後方の個室を指し示した。どうやらそこらしい。見定めたライオンが、向かい歩き出す。急ぎ足と駆け寄ってボーイは個室までを案内し、その後ろから、そこにいたのかと思うほどつまらなさげな顔のアルトもついていった。

辿り着いた一角は、腰掛けるにも丁度の高さで確保されている。ライオンとアルトは上がり込み、見はからってボーイが予約をエメラルドグリーンの文字映像を手のひらで遮った。文字は消え、代わりに温かくも懐かしさ漂わせるオレンジ色の明かりがキャンドルライトと、ふたりの手元にぼんやり灯る。

軽く一礼したボーイがきびすを返していた。

そんなふたりへ見える？　とデミが伸び上がって手を振ってみせている。

アルトは返事すらしそうにないのだから、あぐらをかいたライオンが代わにそんなデミへ、手を振り返していた。

『それにしても、楽団はどうしたんだろ。先に入ってて、って言ったのに』

様子に満足して手を降ろしたデミが、顔つきを一変させる。ならその時だ。エアシャワーブースのドアはスライドした。音に振り返ったデミの表情は、とたん見えた物影に明るく弾ける。現地語で何やら鼻溜を振るが早いか、エアシャワーブースへと駆

け出していった。
　気にならぬはずもなく、ネオンもつられて体をひねる。そこに知った顔を見つけていた。『アーツェ砂の民資料館』で、あれやこれやと資料館の解説をしてくれた館長だ。資料館で会ったときと違い、展示されてもい朱色も鮮やかな貫頭衣の民族衣装をまとうと、手に謎めいたズタ袋を提げている。背後から、同じようないでたちの『デフ6』もまた次々と姿を現していた。
「楽団って……」
　思わずネオンの口から言葉はもれ出す。
　そんなネオンに気付き、急ぎ館長は歩み寄ってきていた。かと思えばネオンの手を握りしめ、息せき切ったように現地語をまくし立てる。だが何を言っているのか、ネオンにはまるで分からない。勢いに逃げ腰となっておれば、慌てて間へデミが入ってくれていた。
　そんなデミの通訳によると、どうやらこの小さな民族楽団がアナログ楽器と競演できるなど、光栄かつ喜ばしいことだ、と言っているらしい。迫真の訴えもまた、控えた演奏に興奮しているかららしかった。
『資料館の館長が楽団の団長で驚いた？』

館長の熱い歓迎から解放されたネオンへ、デミがいたずらげと笑みを投げる。
『聞いてない』
肩をすくめてネオンは返し、してやったりとデミは順序が逆になった互いの自己紹介を手早くすませた。
『館長で楽団長のエンシュア』
「ぼくの命の恩人、アナログ楽器を演奏するネオン」
改め互いはそこで握手を交わす。それだけで全てが見えるのは、不思議としか言いようがない互いの皮膚感覚だ。ネオンは握ったエンシュアの手に、何ら根拠もないまま全てがうまくゆくだろうことを感じ取り微笑み返す。
『アーツェの民族楽器はどんな音？』
その安心感が、早くもネオンにそう言わせていた。
デミから聞き取ったエンシュアは、団員たちを呼び集めにかかる。団員は八名だ。すぐにも整列した団員たちに、薄暗い店内へ民族衣装の鮮やかな朱いラインは引かれていた。
その列に乱れがないことを確かめるエンシュアの視線は鋭い。ままに団員へ向かい片手を、ため気味に振り上げた。

合わせて団員達が、手にしていたズタ袋を鼻溜へかぶせる動きは素早い。

様子に、注文端末をチェックしていたボーイも顔を上げていた。

瞬間、団員たちの鼻溜がマリのように大きく膨らむ。吸い込んだ息をこれでもかと、かぶせた袋へ吹き込んでみせた。袋は翼にも似た形へ弓なりと膨らみ、そこから唇を振るわせた時に出るようなブルルルと言う音を鳴り響かせ始める。

絡め取ってエンシュアが、上げていた手を素早く振りおろした。呼応して団員たちは、翼の先を空へ突き上げる。息もぴったりに首を振ると、先端を回転させ始めた。

見れば袋の先には、小さな穴があいているようだ。そこを通して音は鳴ると、そうして始まった回転に極端な遠近を伴う響きを放ち始める。

ままに数回転。

やがて申しあわせたように団員たちは、一歩、互いの間隔を押し広げた。解き放たれたようにそれぞれが、違った動きで翼を回転させ始める。支えていた手を離すと袋を振り回す者もいれば、自分自身が回転する者、八の字を描いて優雅にリズムをとるものと様々だ。おかげで単一だったうねりは複雑に分散すると、押し寄せる波のごとく幾重にも重なりリズムを厚く、熱く呼応させる。

そこにメロディーはない。ただ追いかけ、たたみ掛け合い、それぞれにそれぞれの

主張を続けるリズムだけがあった。そのリズムが激しくなればステップを踏む団員たちの動きも激しさを増し、やがてこれがダンスであるのか音楽であるのか、あいまいとさせてゆく。

光景に、ネオンは目を見張っていた。

そんなネオンを誘うかのように、それまでかしこまっていたボーイがリズムに合わせ、手を打ち鳴らし始める。音に振り返ったなら、朗らかな笑みを携えたボーイとネオンの目は合っていた。その瞳に誘われるまま、ネオンもまた体を揺らしてみる。

なるほど、乗ってみれば分かることはあった。このリズムの基本は五拍子と三拍子の繰り返しだ。刻んで耳をそばだてれば、ブンブンと唸っているだけの音程にも、それなりに微妙なピッチがあることに気付かされる。それはまるで『ミルト』のバックヤードで困り果てた、あの靴音にどこか似ていた。

至極繊細なリズムのポリフォニー。

だが靴音と明らかに異なるのは、決して単調ではないという点だ。

ならば、と楽団の奮闘ぶりを目に焼きつけネオンは、まぶたを閉じる。考えながら感じつつ、繰り返す音の底へ、紡ぎ出される音の彼方へ、ありったけの集中力で潜り込んでいった。潜りつつ、胸元にぶら下がる楽器を体へ引きつけそっとくわえる。そ

こに横たわるモノを乱さぬよう、深く静かに息を吸いこんでいった。
そして放つ、最初一音。
探る必要などありはしない。
それはいつも、どこからともなく降ってくるモノなのだ。
当たりとばかり、ネオンは開いた瞳で己が十本の指を駆る。
「お、始まったようだな」
ライオンが、あぐらを解いてさも愉快そうに身を乗り出す。個室の上がり口へにじりよると、腰かけそこから両足を下ろした。
前でネオンの吹き鳴らす楽器は、うねり重なる袋の重低音を相手に高らかと弾けクリアな音色を鳴り響かせている。相変わらず音階は小刻みと縦横無尽に連なり、多勢を相手に負けじと、しかしながら茶目っ気たっぷりに歌い続けていた。
塗膜を張り替えつつドックで聞いた時から音は、ライオンの心をことごとく掴んでいる。おかげでまたもや、体は心地よさげとリズムを刻んで揺れ出していた。精算カウンターへ戻ったボーイも同じだ。この時ばかりは、と仕事を忘れて手を打ち鳴らしている。離れて見守るデミはマネージャーそのもの、次第にヒートアップしてゆくネオンと楽団の様子を傍らから注意深く見つめていた。

その中、演奏は、ときおり方向を見失ったようにほぐれ、舵を失った難破船のように迷走する。だが決して止まることはなく、むしろそうした荒波が訪れれば訪れるほど乗り越え的を射た互いの音色は阿吽の呼吸と、強く絡み合っていった。やがてそれは異種格闘技の様さえ呈すと、熱を帯びて見えない渦を巻き、誰にも止めることの出来ない領域へ突入してゆく。

迫力に、いつしか花の飾りつけに追われていた『デフ6』の手が止まっていた。忙しいハズの厨房からもまた、素っ頓狂な顔をしたコックたちが顔を覗かせる。いや、そもそも無視することなどできはしないのだ。耳のみならず皮膚からも浸透してくるこの響きと、そこに込められた熱は、抗うことの出来ない興奮を皆へ伝播させ続ける。やがて見守る誰もの体を、小さく、大きく、揺らしていった。

「今日はえらく調子がいいな」

眺めて満足げに牙をむき出し、ライオンもまたアルトへ振り返る。がしかし壁際へ背をもたせかけ両目を閉じたアルトの仏頂面に、なんら変化は起きなかった。目にしてライオンは、満足の底が抜けたような興ざめに浮かべた笑みを消し去ってゆく。

「だから一体、何だというのだ？」

眉間に生えたテグスのようなヒゲを、ここぞとばかり逆立てた。

「いいではないか。先に靴代を出し渋ったのは、あなたの方だろう？　この分だと貸した金額に利子がついて返ってきてもおかしくはないぞ。そのどこが気に入らないと言うのだ？　一晩明ければ、くれてやるだの言い出すなどと、ネオンでなくともいい気はしない話だ」

困り果てたように、ひとつため息をつく。ままに下ろしていた足を引き上げ、アルトへ体ごと向きなおった。

と、アルトの口元が何事かを綴って小さく動く。その声は嵐のごとく激しさを増した演奏にかき消され、ライオンの耳まで届かない。

「何だと？」

思わずライオンは聞き返していた。

応じてアルトがまぶたを持ち上げる。もう一度、繰り返してみせた。

「茶番なんだよ」

それは棘もあらわな響きだ。耳にして言わしめる理由こそわからず、ライオンはしばしきょとんとしてみせる。ならば間抜けたその視界から抜け出すように、アルトは壁から背を浮かせた。立ち上がるべく丸めた瞬間、そこに差しこまれたスタンエアはチラリ、ライオンの目に映る。

それは『アーツエ』へ上陸して以来、操縦席の背もたれに貼り付けらていたハズの代物だった。いったいどういう風の吹き回しで携帯することになったのか、とライオンは振り返る。いや、スタンエアがそうもアクセサリー感覚のものでないなら、おそらく変わったのは気分ではなく状況なのだ、と気づかされて息を詰めた。

いつしか体は、あれほど満喫していたリズムを忘れ去っている。代わりに、茶番の意味をようやく理解できたような気がしてライオンは、間延びしていた表情を元へ戻していった。

「なるほど。だからしてあなたは、ここを早く立ち去りたい。靴代などくれてやる、というわけか？」

立ち上がったアルトはすでに、胸の高さにまでしかない間仕切りへ歩み寄っている。戯れるネオンと楽団の様子をそこからひどく厳しい面持ちで、見つめていた。

「どうも、あなたとネオンを一緒にしない方が、彼女のためにもいいように思えてならない。あなたはすぐにもここを発て。ネオンのことは、わたしがトラとの間に入る。もう互いに運は使い果たしたはずだ。ラッキーこそ続かない」

と、わずかにアルトの顔が振り返った。

「違うのか？」

向かって鼻先を振り、ライオンは背中のスタンエアを示してみせる。だがのぞくアルトの横顔に変化はない。遠く近くで絶好調と跳ね回る演奏だけが、そんなふたりの間でから騒ぎを続けた。

答えぬまま、アルトの視線はやがてネオンたちへすえなおされてゆく。

「あいつは、ドクター・イルサリの依頼で『ミルト』へ来たと言っていた」

言った。

しかしながらその声は正面を向いているせいか、ライオンには聞こえ辛い。自ずと体は前へ乗り出してゆく。だからして聞き違えだとは思えないのだ。だが確かに、アルトはその先をこう続けていた。

「だが、あいつを呼んだのは俺だ」

「なん？」

思わずライオンは牙を剥き出す。

「ちょっと待て。つまり……あなたは、自分が、その、ドクター・イルサリだと言っているのか？」

なにしろ理屈を辿ればそうならざるを得ない。ついぞ泳ぎそうになった視線を、ライオンはアルトへ固定しなおす。

「まさか、あの連邦名医の？」
途切れ途切れに問い返した。だがそうやって大真面目に語れば語るほど、話は滑稽でしかなくなるのだから手におえない。
「一体、何を言い出す。あなたはジャンク屋ではないか。いくら軍が絡んでいそうだとはいえ、第一、ドクターはすでに死んだ。それがあなただと？」
おかげで一杯食わされた、とやがて笑いはこみ上げ、しかしながら認めてアルトが表情を緩めることこそない。ただ低くこう言い放つ。
「なら、あんたはボイスメッセンジャーだろ。あいつを勝手にされちゃ困る。俺はそれが言いたかっただけだ」
笑い損ねたライオンの息は、そこで止まっていた。
楽団の奏でる低音もまた、ふいと鳴り止む。回転していた袋は今やフィニッシュと宙へ高く放り上げられ、大きく身を反らせたネオンが再びキャッチされるまでの間合いをはかり、くわえた楽器を振り上げていた。瞬間、団員達が戻ってきた袋をキャッチする。素早く吹き口を鼻へあてがったなら、これでもかと袋を吹き鳴らした。おっつけネオンもそこへ加わる。艶やかな音色を上から下へ、壊れそうなほどと綴ってみせた。

果てのアイコンタクトは、ごく自然だ。
息もぴったりに演奏は締めくくられる。
しぼむ袋が、うなだれていた。
ネオンもまた楽器からそうっと唇を離してゆく。
余韻にさえ音色は満ちていた。
満喫して、団員たちがとたんはちきれんばかりの笑みに鼻溜を膨らませる。ネオンもまた、心地よい疲れをにじませ大口を開け、笑い出だした。そんなネオンへ団長が、すかさず握手を求めて手を差し出す。ネオンが握り返せばすぐさまふたりは旧知の友であるかのような抱擁を交わした。その抱擁で、互いの演奏を称えあう。
そこへデミもまた駆け寄っていた。
傍らで手を打ち鳴らしていたボーイはどういうわけだか、涙ぐんでいるらしい。厨房の動きもいつしか完全に止まると調理着に身を包んだコックたちが、振り回して少しくくたびれた花を手にした『デフ6』が、拍手喝采、そんなネオンと団員たちを取り囲む。
沸き起こる歓声にネオンが応じて冗談交じりと、投げキッスを振りまいていた。ひとしきり終えたなら、離れた個室から様子を伺うアルトとライオンへも、跳ねて手を

振る。
だがアルトを凝視したままのライオンに、ネオンへ答えて返す余裕はなかった。ただアルトだけが小さく手を上げ、そんなネオンへ微笑み返す。

長らく閉ざされていたとは思えぬほど、基地の扉は容易く開いていた。そこに嗅ぎ取れるものがあるとすれば先客の気配しかなく、シャッフルの頬は不敵と緩む。
『まさか、これほど年代モノのセキュリティーが布かれたままだったとは、驚きです』
そんな扉に形ばかりと取り付けられていたバキュームロックは、解除手順を誤れば火薬爆弾並みに破裂する真空トラップ鍵だ。だが今や潜るところへ潜れば解除方法はおろか、製造方法すらも公開されているのだから解除も組み立てもその気と度胸さえあれば、可能なロモノだった。ゆえに辿り着いたとき施錠されていたところで、これまたカムフラージュだと割り切るに無理はなくなる。
『丁度いい材料だ。他の閉鎖基地の状態もチェックしておく必要がありそうだと、上へ報告しておくことにしよう』
ミラー効果のせいで揺らぐシルエットとなった分隊員から、部下が八面体の展開図

よろしく解除されたバキュームロックを受け取っている。呆れ声で呟いたなら、返してシャッフルは緩んでいた頬を引き締めなおした。

足元から奥へと伸びる通路へ目をやる。足跡を探しかけて見当らず、なるほど絶えず積もり続ける砂塵にかき消されてしまったのだろう、と諦めることにした。

『安全確保のため、屋内でのミラー効果使用を制限します』

声は、分隊員のものだ。共にシャッフルの肩先を彼らの気配は過っていった。通路の風景がわずかに揺らぐ。とたん、そこに絶縁スーツを着込んだ分隊員らの背は、露わとなった。ままに左右、分かれて壁際へすり寄ってゆく。そのうちの一体が、取り出した電子地図を左腕へ貼りつけた。残る二体は先行すると、一定の硬度を持つものへ命中した時のみ濃度に比例して固まる特性を持ったダイラタンシーベレットのショットガンを目線へ持ち上げ、固定する。

そんな分隊員らが交わし合う合図は些細なものだ。すませて基地内部への前進を始めた。

絶縁コートの前を合わせなおし、シャッフルはその後につく。

ソケットからスタンガンを引き抜いた部下もまた、そんなシャッフルの背を追いかけた。

内部は直線通路によって縦横、規則正しく区切られた単調な造りをしている。そんな通路の左右に部屋は並び、ゆえに建物内部へ進めば進むほど窓は遠のき、穴蔵よろしく辺りの薄暗さは増していった。それでも吹き込んで来る砂塵のせいらしい。積もる砂塵はどれほど足音を忍ばせようと、音を響かせ侵入者をうがる誰もの神経を逆なでる。

払拭して、分隊員らがくまなく薄闇の向こうへ銃口を突きつけていた。

差し掛かった十字路は、やがて三を数えるまでになる。

『この先か？』

越えたところでシャッフルは確認した。

分隊員たちの集音マイクは喉元に貼り付けられており、シャッフルと違い聞き取れないほどだろうと誰もの頭蓋内へ十分、響いて、知らせる。

『右折。左壁面。四つ目のドア』

と部下が、スタンガンを握り締めシャッフルの前へ回り込んだ。

ままに、一枚、二枚とドアをやり過ごす。ならわずかな空気の動きに渦を巻いて舞い上がる砂塵の向こうだ。闇に慣れた目がやがて、『通信室』という造語をとらえた。下に、それまで確認できなかった痕跡がぽつぽつ、残されているのもまた、シャッフ

ルは見て取る。
足跡だ。
ずいぶと奥へ入ったせいか堆積するスピードは表ほど早くないらしく、気づけばシャッフルらの足元から通信室へ向かい、砂塵の中を伸びていた。
おっつけ目にした部下も、シャッフルへ振り返る。その顔があからさまに訴えるのは、そうして見つけた足跡がやけに小さいことについてで間違いないだろう。踏み出した足を並べてみれば、寸法も歩幅もシャッフルの半分ほどしかなかった。『バナール』と『ヒト』との体格差はそこまでなく、明らかに想定していた対象と様子が異なることを知らせている。シャッフルはただ、首を振って部下へ答えていた。
と、その行く先でやおら分隊員が、身を沈める。四枚目のドアだ。その両側へ背を貼りつけた。電子地図を腕に貼り付けていた一体もまた、腰元の携帯パックへしまいこむが早いか入れ替わりとショットガンを引き抜いてみせる。漂う緊張感はあからさまとなり、部下もまたそこでシャッフルをかばい、スタンガンを構えなおした。
前で分隊員の手が、四枚目のドアへ伸びる。
触れかけて、その動きを止めた。
なるほど、ドアはすでにほんの少し廊下側へ浮き上がっている。

『突入します』
こめかみを通して声が、全員の頭蓋内に響いた。
許可してシャッフルは浅くうなずく。
『……二、一』
そうして取られたカウントに、ゼロはなかった。
代わりとばかり、ドアが開け放たれる。
爆風を受けたかのように砂塵は足元から舞い上がり、紛れて、すり足さながら分隊員たちは上体を揺らすことなく通信室内へなだれ込んでいった。ブレることのないショットガンの照準が、けぶる砂塵の向こうを次々ととらえてゆく。標的を探してむさぼるように通信室内を舐め回し、ドア前から死角三方へ散ってゆく。続いて身を躍らせた部下が、忙しげと辺りを威嚇して回った。だが他に動く者の気配はない。開け放たれたドアより流れ込む砂塵だけが、ゆっくり床を這い広がってゆく。
『クリア』
こめかみへ、散っていった分隊員の声が響いていた。
『クリア』
『クリア。オールクリア』

聞いて部下がスタンガンの電極を、天井へ逸らせる。
たちこめる砂塵を払ってシャッフルもまた、そのとき室内へ足を踏み入れていた。
『遅かったか』
吐いて、絶縁コートの内側よりハンドライトを抜き出す。目の高さにかざし、まるで惨状を見るかのような顔つきで辺りの様子を確かめていった。
奥へ鍵型に折れたそこもまた、足元にはうっすら砂塵が積もってい。ドア前に残されていた小さな足跡はそこで、今しがた入ってきた分隊員の足跡に紛れ、散らばっていた。そのランダムな動きと数から到底、ここにいた何某の後を追うことはできそうにない。
『中尉。こちらです』
と、頭蓋内にではなく、鼓膜へじかに分隊員の声は響いた。シャッフルはハンドライトごとその声へ振り返る。聞こえてきた折れた部屋の奥へ、部下と共に向かった。
そこで分隊員は、何かしら見おろし立っている。並んで同様に足元へ目をやれば、あるはずもない機材はそこに散らばっていた。
バッテリーと、一見してただの箱にしか見えない五つの装置。ポータブルスクリーンの映写機に、キーボード。明かりを取っていたのだろう、脇にはかき集められた砂

塵の山へ立てられたハンドライトまでもがあった。
『帰って分析にかけますか？』
見つめた一部始終から部下が振り返る。
促しかけてシャッフルは押し止まった。
『いや、イルサリの放ったウィルスが検出されるだけだろう。ここまでした輩が証拠を置いて逃げ出したのだ。足の着くようなモノは残っていないとみるべきだな』
『一体、誰が？』
うがるのは当然だ。
『誰でもかまわん。ただ、我々がここへ来ていることに気づいたのだろうな』
『だからして逃げおおせることができたと？』
『タイミングがよすぎるだけに、その線が濃厚だ』
『でしたら、そこから我々のことが伝われば、極Ｙはまた対象を取り逃がす可能性が高いと予想されます』
さらに奥の確認へ向かっていた二体の分隊員が、シャッフルたちの元へ引き返してくる。視界の端にとらえてシャッフルは、片耳からぶら下がるマイクへ視線を落とした。

『聞こえているか分隊長。そっちはどうなっている？』
『アズウェルへ向かう極Ｙを捕捉。アズウェルへは先に二体、直行させているが、到着までまだ八〇〇セコンドかかる見通しだ。対象の目視確認は早くともその後と思われたい』
　無線を開けておくよう指示しただけはあり、すぐにも声は全員に届けられていた。
『聞いた通り、こちらの動きが筒抜けとなっている可能性が生じた。我々も急ぎそちらへ向かう。変化があれば、すぐ連絡しろ。場合によっては、我々の手で対象の確保に乗り出す。ゆえにミラー効果は切るな。連邦が関わっていることは伏せておきたい』
『了解』
『この基地に、アシになるようなものは残されているのか？』
　会話は途切れ、シャッフルは誰というでもなく問いかけた。
『自分は、先ほど建物の周囲を確認したおりに、ビオモービルがあったのを見ております』
　答えたのは一番奥に立っていた分隊員だ。そもそも軍用車両は避けておきたく行軍を決め込んでいたが、間に合いそうもないならその顔へ、うなずき返す。
『案内してくれ。それを使おう』

合図に、分隊員はきびすを返した。連なる足が次々と、つもる砂塵を踏み散らしてゆく。ドアが締め直されることはない。誰もいなくなった部屋でただゆう、と空を切る。

そうしてトラはため息を吐き出す。どうにか踏みしめるに至った『アーツェ』の地を、万感の思いを込め見渡していた。

何しろ今夜はとびきり白い様子だ。おかげでの視界不良に加え、放置されて長らく経つ基地の滑走路は砂塵も深く、トラが予想していた以上、ずいぶん荒っぽい着陸はすまされたところでもある。

『ったく、ネオンを拾う前に、これではこっちが遭難してしまうではないか』

ぶるんとシワを波打たせ、ひとつ身震いした。

その背後、かしいで停泊する『バンプ』の片側には、水かさもだいぶ引いた間欠河川が流れている。遠くには幻影のように基地跡が、象徴的な管制塔をけぶる空につき立てていた。同じ滑走路のだいぶ後方には在りし日のモノか、軍用らしき船舶が一艘、影となって浮き上がってもいる。

それにしてもさすがは町外れだ。それら全てのどこをとっても、トラの目にはもの悲しく映って止まなかった。思わず心もとなさに襲われかけて、振り切りトラは遠くへ視線を投げる。基地とは正反対にある町を見据え、腹へ力を込めなおした。ままに抱えていたオイルボードを地面へ投げ出す。ならボードは沈むことなく浮き上がり、トラは砂地に馴染ませその滑り具合を確かめた。どうやら急ぎ塗りつけたオイルに問題はないらしい。上へ片足を乗せる。もう片方の足で、トラは地面を蹴りつけた。ボードがスルリ、滑り出す。調子を合わせてトラはもうひと蹴り、ボードへ加速をつけた。

砂塵を切るボードの振動が、トラの士気すら上げてゆく。

もう十分だろう。トラはボードの上へもう、一方の足も乗せた。ままにシワをなびかせると、サスの店めがけ白い夜を飛ぶように滑り抜けてゆく。

揺れ動く。

並ぶ通信機材一番奥、それまでピタリと閉じていた片側が、やおら小さな音を立てて浮き上がった。次の瞬間、それは投げ出される。勢いに砂塵はもうと舞い上がり、

たわんだ金属がドラを打ち鳴らしたかのような音を辺りへ響かせた。
そうして奥から、空を手繰って突き出されてきたのは手だ。
連なりサスは姿を現す。
これでもかと小さくたたんだ体を引き伸ばすと、機材の中から這い出してきた。
『う、いちちちちち。全く、トシはとりたくないもんじゃの』
別室へ移るとしても明かりを掲げたままではあまりに目立ち過ぎ、だからといって手探りで初めて訪れた場所を移動することは、はばかられた。おかげでそうと決まれば行動は怒涛のごとしだ。消えそうなハンドライトの明かりを頼りに、バックパックから掴み出した工具で通信機材のフレームを外す。トレーのようにはめ込まれた基盤を抜いて放熱スペースへ押し込んだなら外したフレームを片手に、どうにか潜り込める程度できた空間へ、サスはもぐりこんでいたのだった。
同時に砂塵は吹き込むと、いかつい安全靴はなだれ込んできている。
そうして排熱用の金網越し、しのいだ息詰まるひと時は幸運の連続といっても過言ではないものだった。
知らぬ間にぶつけたのか、それとも緊張するあまり力が入り過ぎていたのか、やり過ごしてサスは痛む体をめいっぱいに伸ばす。

『ありゃ、間違いなく軍じゃの。ミラー効果など特殊部隊しか考えられん』
痛みで無事を確認し、その頭をもう一度、通信機材の隙間へ突っ込んだ。一緒に放り込んでいたバックパックを引きずり出す。探り出した最後のハンドライトを灯した。
『しかし言いおったの。連邦がかかわっていることを伏せておきたい、じゃと？　ふん、間抜けな奴らじゃ。もうバレとるわい』
続けさま携帯電話もまた、取り出す。手早く再度、アルトの船へつなげた。呼び出し音へ耳を傾けつつこぼす。
『ただ、まだアルトへは伝わっておらんがの』
待つ間、もう片方の手で電子地図を展開させた。帰りの順路を確認する。だが終えたところでアルトが応答する気配はなかった。
『やはり、店か』
見限り、押し込んできた輩も口走っていた『アズウェル』の回線を調べるべく、町の通信局へ携帯をつなげる。ところがだ。そうして初めて気づいたのは電波状態の悪さだった。
『なんじゃ、こんな時に』
確かにある程度、整備された町とその周辺なら問題はないが、ここはまるきり手入

れされていない町外れの砂塵に埋もれた閉鎖基地内だ。思った以上、砂塵による電波の乱反射が著しい。うちにも不通となってしまう。

『てぇいっ。こんなことなら、もう少しまともなヤツを持ち込めばよかったわい』

バックパックへ投げ込んだ。押し込んできた輩が残していったように、物理的にも使用不能となった機材に回収の必要はない。サスは必要最小限を詰め込んだバックパックをヤケクソ紛れに背負いあげる。鼻溜を振った。

『何としても、あやつらより先に知らせねば』

ドアへと踵を返す。ハンドライトの明かりを頼りに、頭の中の順路をなぞり歩いた。

『しかしドクター・イルサリとは、症候群の権威じゃろうが。しかももう死んどる。名前を使っとるあのラボはなんじゃ？　そことアルトに何の関係がある？　まあ、あるからこそ船賊を使ってまで追い回さねばらんのじゃろうが、だとして理由はなんじゃ？』

サスは眉間へ力を込める。そうして己が垣間見てきたからこそ疑いようのない事実へ、目を凝らしていった。

『お前はそこで何をしておったというんじゃ？　アルト』

最後の十字路を折れる。数歩も行けば掲げたハンドライトの向こうに、表へ続く扉

はおぼろげと浮かび上がった。どうやら先にここを出て行った輩は、ご丁寧にも扉へバキュームロックを仕掛け直していってくれたらしい。施錠を示すと、扉を貫通して表のバキュームロックへ突き刺さるように設置された真空閂は、淡い赤色を滲ませていた。

見定め扉へ駆け寄って、サスはハンドライトを肩とアゴで挟みこむ。真空閂の側面につけられたバルブをひねって真空を解き、赤い警告色が青へ変化して行く様を見守った。完全に真空が解けたところで閂を手前へ引く。表で解除、展開されたバキュームロックの動作は手ごたえとなって閂から伝わり、バルブをノブ代わりにしてサスは扉を引き開けた。

やおら砂塵が吹き込んでくる。目の前に白い夜は広がった。いつしか基地の片側に流れていた間欠河川は、その姿を消してしまったらしい。ただ川があっただろう気配だけを残すと、深くえぐれた砂塵が広い谷間を作り上げているのを見る。けぶる果てには押し込んできた輩が乗りつけてきただろう二艘の船が、シルエットとなりおぼろげと浮かび上がっていた。

サスはハンドライトを捨て、扉へバキュームロックをかぶせなおす。

『この手のセキュリティーで助かったわい』

完全にロックされたことを見届け、振り返った。疲れのせいか、慣れているハズの砂塵に足を取られてならない。堪えて繰り出し、乗りつけてきた店のビオモービルへ急いだ。建物を回り込んだところにあるそこは、放っておけば完全に埋まるだろうことを考慮して選んだ、少しばかり窓のひさしが突き出た場所だ。だがようやっと辿り着いて、サスは我が目を疑っていた。

『……どう、言う、ことじゃ？』

何しろ砂山しか見えない。

バックパックを投げ出していた。

転がるように駆け寄ると、はいつくばって砂塵を掘り返す。しかし掘れど探せど、ビオモービルが出てくる気配こそなかった。そうしてサスは、地面からひさしまでの高さに変化がないことに気付かされる。つまるところビオモービルは埋まってしまったのではなく、忽然と消えてしまったのだと理解した。なら押し込んできた輩の言葉は、唖然とするサスの脳裏へ蘇ってくる。

『そうか、奴らが……！』

確かに、町まで表に停めてあるビオモービルを使うと、彼らは言っていたのだ。

『くぅ、なんてことじゃ……！』

すでに疲労困憊。おかげで町までの道のりは、途方もなく遠く感じられていた。だがこれは、諦めていい話であろうはずもない。

知らぬ間に積もっていた砂塵を、体からサラサラと落としてサスはどうにか立ち上がる。地平線に薄くわずかにへばりつく白い影のような町を見据えた。

『何が何でも、知らせてやらんと』

鼻溜を振り、手足の動きもバラバラのまま、町へ向かい走り出す。

またひとり、『アズウェル』へと客が消えていた。

灯された赤いホロ看板へ吸い寄せられるように、白夜の彼方から現れ出でた客たちは出迎えるボーイへ上着と靴を預け、次から次にエアシャワーブースへと潜り込んでゆく。

詰まるところ、みな噂しか知らなかった。ゆえに抱えた期待の全ては、語り草となった極Yのトニック同様、映像と伝聞がくどいほどに刷り込んで植えつけた、記号のようなステレオタイプの感動だ。そこに実感がかけている限り知識は己がものにならず、補填されるものが極上の感動であるなら、誰もがこの機会に胸をときめかせ『ア

ズウェル』へ足を運んでいる。

なじみの客は出迎えるボーイと親しげに挨拶を交わし、そうでない者たちは意気揚々とドアをくぐっていた。すでに個室はその半分が埋まり、演奏が始まるまでのひと時を、いつも以上、弾む会話と多彩な料理で過ごしている。それら個室の間を行き交うボーイは、普段ならクロークで預かる靴や上着類を個室にまで届けていた。収容客数から保管は不可能と判断されたせいで、そのひと手間はおそらくボーイたちを忙殺しているだろうが、彼らにそんな様子は微塵もうかがえない。かつては八つ星レストランに選ばれた、これも実力か。まるで水槽を泳ぐサカナのごとくしなやかな身のこなしで、フロアを行き交っていた。

やはりこの花はポップの店が卸したものらしい。デミのふれこみにより昼間と違いダークなドレスに身を包んだポップは、エアシャワーブースを出たところ、壁際の最も大きな飾り付けへ熱心な視線を向けている。そんな彼女へもボーイはウェルカムドリンクを差し出し、受け取ったポップの目に厨房より飛び出してきたデミの姿は映った。デミも目ざとくポップを見つけたなら、客とボーイの間をすり抜け駆け寄り、つま先立っていつも以上の熱弁をふるって今日を語る。

かたや離れた場所で立ち話に興じているのは、赤い『アーツェ』の民族衣装を着た

民族楽団団長のエンシュアだ。袋を片手に、打ち合わせと称して行ったセッションの余韻もそのまま、オーバーゼスチャーで、個室に腰をおろした知り合いと鼻溜を揺らし合っていた。

振り上げたその手が、すれ違うボーイと思わずぶつかりそうになる。だが知っていたかのようにかわすボーイは、実に器用だ。そのさい、おどけたように首さえ傾げてみせたなら、オレンジ色の明かりを反射させた周囲から、笑みは引こぼれた。

老いも若きも『デフ6』も、偶然この惑星を訪れた『デフ6』以外の種族も、記号が実感に変わるその衝撃をまちかまえ、思うがままに期待を膨らませている。これでもかと胸を躍らせ、その瞬間を待っていた。

それぞれの思いはそうして『アズウェル』で渦を巻き、夢という名の、しかしながら揺るぎないひとつの像を作り上げてゆく。共有されたそれは、まさにかつて既知宇宙共通の話題であったとおり、国境なき別世界を体現しようとしていた。

だからしておそらく、この先、言語と理論は必要なくなるはずだった。ゆえにどこから誰が何を携え訪れようとも、この世界の住人にすっぽりおさまるはずでもあった。

そう、己がどこから来た誰であるかを、忘れ去ってしまったように。

どこから来た誰が、己であったのかを捨て去ってしまったかのように。

エンシュアとのニアミスをやり過ごして厨房へ向かうボーイは通りすがり、アルトとライオンの個室から飲み干されたグラスもまた回収している。だがふたりは、アルトの告白に黙り込んだままだった。ただライオンは周囲が騒ぎ立てれば騒ぎ立てるほど、まだ自分に運は残っているだろうかと考え続ける。動じずアルトは壁へ背をもたせかけると、組んだ両腕で目を閉じうつむいていた。それが何かを待っているように見えたなら、なおさら不穏な空気はライオンの中で拭えぬものと膨れ上がってゆく。だとしてどうしても追及する勇気だけは持てずにいた。

全てを知らず、ふたりの個室からグラスを引き上げたボーイの行く先、厨房の奥に設えられた従業員控え室にネオンはいた。残念ながらこうしたイベントが初めての『アズウェル』に、気の利いた楽屋はなく、あてがわれたのは左右に『デフ６』用の小さなロッカーが並ぶ更衣室、その中央に置かれた円形のベンチにいた。

そこには先ほどデミが残していった賄いの皿が、まだ湯気を上げたままで置かれている。加工惑星である『Ｏｐ・１』の他種族料理がベースとなったそれは、『ヒト』も楽しめるクリームシチューによく似た一品だった。だがネオは手をつけていない。かつてない緊張が、そんな気分にさせてはくれなかった。

思えばこれまで盲目なまでに音色を溺愛するログジャンキーしか、相手にしてきた

ことがない。だからして受け入れられて当然と、楽器の上にあぐらをかいてきていた。だが今回は違う。

あおって隣接する厨房からはフル回転の悲鳴が聞こえていた。それはいまだ一度ものぞいていないフロアの大盛況ぶりを伝え、並ぶ好奇の目を予感させた。晒されて、その期待に応えることができるのか。また不安は吹き出す。それまであった自信など、あとかたもなくかき消してしまっていた。

根拠などなかったのだ。

取り戻せぬままネオンは、初めて己が自信の薄っぺらさに愕然とする。覚えた心細さに、首から下げた楽器ごとベンチに立てた両ひざを抱きしめ小さくなっていった。

ままに息を殺す。

続かず体を揺すってみた。

だがそれは最初の一音さえ選び出せそうにないほど、支離滅裂なリズムしか刻まない。

最悪だ。

こんな状態でいつもの演奏などできやしない、と思う。

あざ笑って時間は迫り、厨房のけたたましさだけがコト切れそうなほどまでにテン

ションを上げていた。
デミに相談しようか。いや、混乱させるに違いない。思考は低く鈍いところを何度もぐるぐる回り続ける。
果てにそれはふい、と浮かんでいた。
当然だ。
いつも期待に応えてなんていやしなかった、と。
何しろ繰り返してきた演奏の全ては、降り注ぐままにが常だった。閃いたそれを伝えたい心のままに、が全てだった。音はいつだって、ネオンが自由にしてきたものだった。
演奏を習得し記憶は、過去にしかないのだ。
だからして忘れてしまったはずなのに、それでも動く体はネオンの意思を越えていた。
それを今さら変えようなんて、出来るはずもない。
そして出来るはずのない事をしようなどとと、混乱して当然だと思えてくる。
瞬間、塞いでいた胸で何かは弾けた。
まるで視界が新しい色に塗り変えられたような錯覚さえ覚えてネオンは、詰めてい

た息を吐き出す。
曖昧ながら、明確とドコカに或る己の核は、またもやネオンを饒舌にしようとしていた。
湧き出す思いは音色と弾けて、ネオンの中を満たしてゆく。
それはやがて不安に焦げ付いていた心の底を押し広げると、そこに湖面をあらわとした。湖面は降らせる空を、その根源を映してネオンの中でしん、と冴えわたってゆく。
抱えていたヒザから腕をほどいていた。まるで空から舞い降りてきたかのような気分だ。ネオンはそうっと床へ足を下ろしてゆく。
厨房の怒号はまだ止んでいなかった。だが今となってはそれも上滑りするほど、部屋は静かだ。
確かめネオンは二度、瞬く。
ロッカーに後付された小さな鏡に、そんな自分の顔が妙に歪んで映っていた。意識してネオンは小さく笑いかけてやる。
呼び止めてドアがノックされていた。答える前に振り返れば、その時がやってきたことを告げてドアは押し開けられてる。

『おねぇちゃん。出番だよ』
現れたデミが、誘って鼻溜を振っていた。
顔へとネオンは、静かにうなずき返した。

『店舗正面確保』
今日に限って濃い砂塵のせいだ。頭蓋内で鳴り響く分隊員の声にはノイズが混じっている。
『状況は？』
折り返したのは分隊長だった。
『現在もなお、客が入店中の模様。この様子ですと中は……』
つづる先発二体の分隊員は、白い夜に紛れ目抜き通りを挟んだ『アズウェル』の真向かい、並ぶ店舗と店舗の間に身を潜めている。
『そこから対象の確認は可能か？』
最後まで聞くことなくシャッフルが、通信に割って入った。もちろん分隊長が先に二体を現場へ向かわせたのも、そのためだ。しかし彼らの答えは冴えない。

『申し訳ありません、中尉。ここからでは不可能です。路面に解放された窓がありません。すでに入店しているとなると、確認には内部への侵入が必要です』

灯るホロ看板の下、窓ひとつない壁面に三輪ジープとコンパクトなビオモービルを並べ、『アズウェル』はかたくななまでに店内を覆い隠している。

と、分隊長の鋭い声が上がった。

『左三〇！　およそ四〇エリア前方。濃紺の外套を着た七体、極Ｙだ』

『アズウェル』をくまなく眺め回していた先発二体の視線が、弾かれたようにそちらへ飛んだ。ミラー効果の表面処理がその速度についてゆけず、ほんの一瞬、周囲に紛れていた彼らの姿を歪んだ風景として浮かび上がらせる。

『確認』

『我々は八エリア後方ににつけている。アズウェル裏手にも極Ｙ、十五体が移動中。双方、目的地到着までおよそ七〇セコンドと予想』

『奴ら、またフェイオンの時のようにハデにやらかすつもりではないだろうな』

聞いたシャッフルが、苦味を含んだ声で放った。誰にも見えていない場所で、その顔をひとなでしてみせる。

『部隊を確認』

先発二体が、分隊長らを捉えたと告げた。
『こちらも、お前たちの位置を確認した』
『こちらは現在、ビオモービルで基地跡よりアズウェルへ移動中だ。到着まであと四八〇セコンドはかかる見通しとなっている。ゆえに指示の変更はない。我々の到着前に極Ｙが突入した場合、現場の指揮は続けて分隊長に任せる』
幾分落ち着きを取り戻したシャッフルの声が、通信に混じった。
『了解』
そうして『万が一』と、分隊長は付け加える。
『これが極Ｙの勇み足で終わったならば？』
『後始末は奴らにやらせろ。我々は即刻退却する』
シャッフルの返事に淀みはない。
『了解した』
そうしてあく、一呼吸。次の瞬間、さらに厳しさを増した分隊長の声は、誰ものこめかみに響いていた。
『いいか、これから我々は裏手通用口と、正面入り口、側面の非常出口三方に分散して店内へ侵入する。正面入り口と裏手通用口は共に極Ｙの監視と、対象確保の際のフ

オローを続行。非常出口の部隊のみ、先行して対象の確認へ向かう。先発二体はその部隊と合流。ただし正面入り口部隊に限り、店内は混雑が予想されるため、他の部隊から対象確認の報告が入るまで、突入を禁止する。状況連絡は怠るな。以上だ』

わずか蹴散らされて、路面の砂塵が小さな砂埃を巻き上げた。分隊長の声が途切れたことを合図に、部隊は三方へ道を分けてゆく。一方は目抜き通りを離れて路地へ消え、分隊長率いるもう一方は目抜き通りを足早に横断し、路地から現れた先発二体と合流した。再び通路を横切ると『アズウェル』の壁伝い、路地裏に面する非常出口へ回り込んでゆく。残り一方は変わらず極Ｙを捕捉しつつ、『アズウェル』へ向かった。

と『アズウェル』を前に、極Ｙの足は止まる。

『裏口、極Ｙ、店舗前で待機中』

『ビオモービルは、店の東側より通りに侵入した』

『正面入り口。極Ｙは四エリア手前で停止しています』

飛び交う通信の中、確かに通りで足を止めた極Ｙは、けだるい仕草で辺りを見回している。

『周囲を警戒している模様』

『非常出口、到着。状況は了解した。動きがあれば即刻伝えろ。我々はこれより対象

確認のため店内に侵入する』

その時テンは、下二本の腕を外套の中に隠すようにして、そっと片手で動話を綴っていた。

（なんや、さっきから、妙な気配がしてへんか？）

横目に見て取ったメジャーは、『アズウェル』へ向かっているのだろう最後の客が自分たちを追い越して行くのを眺めながら、まるきりテンとは違う方向へ顔を向けている。

（どういう、ことですか？）

つづるテンたちの手元を隠すように残る部下たちは、不自然なまでに通りで小さく集まっていた。

（なんや、風とは違う砂埃が、通りの向こうへ舞い上がっていきよった感じがする）

ならメジャーがテンの示した方へ、なにげなく視線を投げる。

（よく見えませんが……）

乳白色にけぶった夜は影すら塗りつぶして、白く膨張する布のようだ。

（俺が神経質になりすぎとるだけか？）

時にここでは、こうした環境に不慣れな観光客が、距離感覚や方向感覚を失って町の真ん中で遭難することもある。舌打ちするように指を鳴らしたテンは、こだわっても仕方のない錯覚から自らを切り替え『アズウェル』へ顔を持ち上げた。

『アズウェル』へ向かっていた客の波は、先ほどメジャーが見送った者が最後らしい。店先で出迎えていたボーイが店内へ、戻ってしまっていた。今となっては赤く灯るホロ看板だけが、すました面持ちでテンたちをじっと見下ろしている。

（ボス。クロマから、連絡っす）

壁になっていた部下が、唐突に振って外套の前を解いた。視線を引き戻したテンへ、下二本の腕でプラットボードをそっと差し出す。裏口前へ到着したことを知らせるクロマはそこで、突入のタイミングを要求していた。テンはひじから下だけを使うようにして、外套に隠れた下二本の腕だけを使い、返事を読み込ませてゆく。

（俺らが先に客を装って店ん中、入る。様子が分かってから突入や）

送ればすぐさま、クロマから（了解）の短いメッセージは返されていた。その段取りを確認しあうように、テンを囲んでいたメジャーたちも目で頷き合う。傍らにおいてテンが下二本の腕を隠し、再び外套の前をきつく合わせなおした。メジャーたちを

裂くと、『アズウェル』へ向かい歩き始める。
だとして招かれざる客に出迎えなどない。
ドアはただ、埋め込んだメッセージウインドへまたもや造語文字を、流していた。
『本日は、予約にて満席となっております。恐れ入りますが、ご予約のないお客様に関しましてはご入店いただけません。またのご来店を心よりお待ち申し上げております　アズウェルスタッフ一同』
何が書いてあろうとも、ここまで来たならとる行動は決まっている。睨み付けるように見下ろしテンは、そんなドアを押し込んだ。砂塵の侵入を防いでいたエアパッキンから空気の抜ける音は聞こえ、ドアが奥へと開いてゆく。突き出した銀の噴射ノズルがどこかしらゴージャスなエアシャワーブースは広がると、隔てた向こうから、ざわめく声と乾いた拍手の打ち鳴らされる音を響かせた。それは白々しい夜とは裏腹の、熱を帯びた生き物の気配だ。
かなりの数がひしめいている。
確信してテンの表情も引き締まる。

最後に潜り込んだ部下がドアを閉めていた。
合図に、ノズルから突風にも似た空気が三百六十度、テンたちへ吹き付ける。そうして吹き飛ばされた砂塵を回収すべく、一転してブース内の空気は吸い上げられていった。途切れたなら、店内へ通ずるブースのドアはスライドし、テンらを中へ招き入れる。
花が、暗がりを息苦しいほどの原色で染め上げていた。その色にまみれて客はひしめき、こぼれんばかりの笑みを浮かべ、息をつめたように一点を見つめている。その数と密度は、予想以上だ。
がしかし、おかげで入店したテンたちを気にとめる者はいない。客の入り乱れる『ミルト』フロアと違い、これは好都合と、テンはたちは対象を探して並ぶ顔から顔へその目を走らせていった。
気づき近づいてきたボーイは、遅れてやってきた客が空いている場所を探しているのだと勘違いしている様子だ。すぐにもテンへ席がない旨を説明し始める。だとして最後まで聞いてやる義理などない。テンはボーイを押しのけ、態度にボーイが表情を一変させた。招かれざる客であると直感的に嗅ぎ取ったらしい。その体をテンたちの前へ回り込ませる。それもまたテンが跳ねのけたなら、もみ合いとなっていた。様子

に、別のボーイもまた駆ける。おかげで思うよう対象すら探せなくなっていた。テンは苛立ち、外套の中からかくまっていた銃器さえ、ひと思いと振りかざしてやろうかとさえ考える。

その時だ。

何をや待って一点を見つめていた客たちの間から、堰を切ったような歓声は沸き起こった。割れんばかりの拍手は乱れ飛び、何体かがその場で勢いよく立ち上がってみせる。

不意をつかれてテンとボーイたちは、振り返っていた。

それは厨房、開かれた観音扉前だ。

テンの目に、楽器を携えたヒトの姿は飛び込んでくる。

非常出口のロックは形ばかり。恐らく土地柄、他者を警戒する傾向が少ないのだろう。磁気錠の解錠には、パスワードさえ必要なかった。門として横たわるコイルヘッドルを忍ばせ電圧を変えたなら、磁気鍵は音すら立てず開く。

否や分隊長を含め四体は、電子地図にダウンロードさせた店舗見取り図をバイザー

のスリットへ差し込んだ。店内の構造は透視図を重ねるかのごとく視界に映り込み、おかげでこの非常出口の向こうに防砂用の二重扉が、その奥には厨房側面へ続くバックヤードの通路が伸びていると知る。首を振ったなら、通路中ほどの左手側に、店内の手洗い前へ伸びる通用口は取り付けられていた。その通用口を通してバックヤードと店内がつながっていることもまた見て取る。

恐らく緊急時、正面出入り口と、厨房奥裏口、そして今しがた通って来た経路の計三方を解放し、客を輩出する構造らしい。

再度確認して分隊長は、必要最低限、押し開けたドアの隙間から店内へ侵入した。

そのさい遮ったセンサーが、防砂用の換気装置を作動させる。だがよほど客の対応に追われているらしい。ほぼ直線と伸びる通路に、何某が姿を表す気配はない。

静まり返った前方を見据えて分隊長は、透明の二重扉をスライドさせた。歩調に合わせてバイザーの見取り図映像がゆっくりスクロールしてゆく中、生活空間へ足を進めてゆく。

『二手に分かれる。先発は、突き当りの厨房と更衣室を確認。我々は、通用口から店内の様子を確認する』

奥に手洗いが控える通用口が近づいてきた所で、指示した。通用口へ辿り着いたと

ころで足を止めたなら、揺らめく風景となり先発二体はそんな分隊長を追い越し、奥へと消えてゆく。

見送るまでもなく通用口へ身を寄せていた。

分隊長はドアへ耳をそばだてる。

聞き取ることができるのは幾重にも折り重なる周波数の高い食器の音と、時折、起こる爆発的な笑い声だけだった。

そっとドアから身を離す。

いかにも握り易く成型されたレバー型のノブへ、手を添えた。すかさず同行していた分隊員らがダイラタンシーベレットのショットガンを持ち上げ、万が一に備えてドア際へ張り付きバックアップの体勢をとっている。

『表出入り口。極Y、入店』

と、飛び込んでくる通信。

タイミングを失い、分隊長はノブから手を離した。

『裏口は？』

問い返す。

『極Y、待機のまま』

『更衣室、状況を伝えろ』
矢継ぎばや、いましがた向かわせた二体を呼んだ。
ならまるで待っていたかのような間合いで答えは、返えされる。
『現在、目的地へ移動中』
確かに店舗は通りに沿って細長い形をしている。足音を立てて走らない限り、そう早く辿り着けはしなかった。
『隣接する裏口から極Ｙが突入してくる恐れがあるぞ。気をつけろ』
『了解』
そうして分隊長は、ドアノブを握りなおした。そこにカギらしいカギは取り付けられていない。他に塞いでいるものがあるとするなら、ドアの向こうに立ち上がる関係者以外立ち入り禁止の文字映像くらいである。バイザー映像は、そうして開いたドアの向こう、左手に手洗いへの入り口が据え置かれていることや、そこが客席から奥まった場所であることを知らせていた。
柔らかくノブを捻る。
爆弾でも解体するかのような慎重さで、通路側へ引き開けていった。
同時に浮き上がったドアの隙間から、バイザー映像では知ることのできない薄暗さ

は忍び込んでくる。伴い遮断されていた話し声は明瞭と吹き出し、食器の音が甲高さを増していった。

バイザー映像が示す通り窪んだそこは、目隠し代わりに置かれた観葉植物がフロアとを仕切っている。幸い、手洗いを利用しようとする者も、している者もい様子だ。躊躇することなく分隊長は通用口を潜り抜けると、壁に背をつけ前進した。後方についていた分隊員もまた死角をフォローすると、対面する壁へ身を沿わせる。息を合わせて観葉植物まで歩み寄り、葉陰から互いに客席の様子をうかがった。

『店内、極Ｙを確認』

ボーイたちとモメている。

視界の端に捉えつつ、すかさず対象の姿を客席の中に探した。

さなか震えたのは、こめかみだ。

『厨房、クリア』

『更衣室、クリア。通用口に合流します』

報告は飛び込んでくる。

分隊長もまた自らの現状を告げた。

『対象を確認中。多すぎて、すぐにはみつかりそうもない。極Ｙが店側とモメて……』

その時だ。
何をや待って一点を見つめていた客たちの間から、堰を切ったような歓声は沸き起こった。割れんばかりの拍手は乱れ飛び、何体かがその場で勢いよく立ち上がる。
それは厨房、開かれた観音扉前だ。
楽器を携えたヒトの姿はあった。

（あいつや！）
瞬間、テンはそれまで隠していた下二本の腕を出すとボーイたちを突き飛ばし、上二本の腕でつづる。

無論、まくしたてたのは分隊長も変わらない。
『確保対象を発見。客席、厨房前！』
そしてそれは、正面入り口前で待機していた部隊への突入許可の合図ともなる。

知らず通信係は、クロマへ（突入）の動話を飛ばしていた。
背にテンは外套を払いのけると、四本の腕をボーイたちへ振り上げる。

だからして飛び込んできた一報に、クロマもまたちゃちな磁気錠を力任せと蹴り破っていた。

言わずもがな後方で様子を伺っていた分隊員たちの間に、緊張は走る。

『裏口、極Y、突入開始』
『正面入り口、突入します』
立て続け分隊長のこめかみに、二つの声は響いていた。